

とみだ 近世の富田焼Ⅱ—平尾窯跡出土遺物—について

森下友子

1. はじめに

富田焼は現在のさぬき市富田西付近で焼かれた焼物である。富田焼の研究は古くから松浦正一氏、豊田基氏によって文献資料を中心に行われてきた⁽¹⁾。

豊田氏の調査によると、近世の富田焼の窯には吉金窯跡と平尾窯跡、齊藤窯跡がある。吉金窯跡と平尾窯跡は昭和40年代に大川町教育委員会によって発掘調査が行われ、近世の陶磁器を焼いた窯であることが確認された。調査の概要は大川町史で紹介されている⁽²⁾。吉金窯跡・平尾窯跡の出土遺物の一部は報告されている⁽³⁾。今回は平尾窯跡出土遺物の概要を報告し、窯の操業期間、吉金窯跡や高松藩のお庭焼である理兵衛焼との関係について検討を行う。

2. 平尾窯跡

平尾窯跡はさぬき市富田西筒野の五位池西岸に所在し、吉金窯跡の南東1.6kmの地点にある。五位池の西岸の堤防上には南北に走る小道があり、この小道の西側にはさらに高くなっている、比高差2mの斜面がある。斜面の西側には平坦地があり、ここには2軒の民家が南北に並んでいる。平尾窯跡はこの2軒の民家の間に位置する。

平尾窯跡の発掘調査は大川町教育委員会によって1970年3月10日～26日に実施され、階段状の3室の焼成室が検出された⁽⁴⁾。焼き口は検出されなかったが、東方向（五位池側）に焼き口をもつと推定される。発掘調査終了後、窯跡は埋め戻されて保存された。

3. 平尾窯跡出土遺物

平尾窯跡から出土した遺物はさぬき市歴史民俗資料館に収蔵され、整理用コンテナ11箱にほぼ満杯の状態で収納されている。出土遺物には磁器・陶器・窯道具など様々なものがある。これらを種類ごとに分類し、破片数を数え、表1～4にまとめた。土師質土器や出土した主たる陶磁器よりも極めて新しい時期の陶磁器など、平尾窯跡で生産されたものとは明らかに考えがたい遺物もみられたが、全体の破片数の1%未満であった。出土遺物の大半は陶器あるいは素焼の陶器未製品で、91%を占める。その他は窯道具が8%、磁器が1%未満である。

図2～13、写真図版3～12は平尾窯跡出土遺物の一部を図化したものである。ここでは、図化した遺物を中心に、陶磁器の紹介を行う。陶器あるいは素焼の陶器未製品の破片は全体の91%を占める（表1）。碗・皿・鉢・燭台・徳利または瓶・蓋物・土瓶蓋・土瓶・土鍋・行平鍋・灯明皿・灯明受皿・灯明受台・ひょうそく・ろうそく立て・水注・仏飯器・甕・植木鉢・土管など多器種にわたる陶器が生産されていた。以下、器種別に概要を述べる。

陶器碗とその未製品は104点ある。平尾窯跡から出土した遺物から明らかに平尾窯跡で生産されたものではない陶磁器・土器、種類不明の陶磁器、窯道具を除いた破片数は3370点であるが、この3%を占める。碗の形態は①腰が張る丸形碗、②腰の張りが少なく、口縁部が外方に向かって開く丸形碗、③広東形碗、④底部と体部が明瞭に屈曲し、体部から口縁部はまっすぐにのびる碗（いわゆる小杉碗）、⑤筒形碗、⑥端反形を呈し、体部外面に亀甲形の面取りをする碗、⑦口縁部が外方に直線的に開き、体部外面に強いろ

くろ目をもつ碗、⑧体部下半が膨らむ碗がある。碗①は外面に鉄絵で唐草文を描くもの（1・2）、灰釉（3）、鉄釉（4）を施すもの、体部に藁灰釉を施し、口縁部のみ暗緑灰色釉を掛けるもの（5）、体部に透明釉を施すものがある。2・3は高台断面形が四角形を呈するが、4は三角形を呈する。碗②は灰釉を施すもの（6）と、鉄絵を描くもの（7）が1点ずつある。6は内外面に灰釉を施すが、体部下部から底部外面は無釉である。7は体部上半を欠損するため、全体は不明であるが、外面には鉄絵を施し、高台部内外面に丁寧に釉を施す。碗③は内外面に灰釉を施すもの（9）、素焼の未製品（10）がある。碗④は無文で、内外面に灰釉を施すもの（15）、藁灰釉を施すもの（113）がある。また、素焼の未製品では鉄絵を施すもの（12～14）がある。12は梅の花、13は丁寧に若松を描く。14は12・13に比べ、底部と体部の屈曲がやや不明瞭である。若松は13に比べてやや雑である。113は内外面に藁灰釉を施す。断面を観察すると、底部は内面から粘土を充填して、成形していることがわかる。胎土は暗灰色を呈し、非常に緻密で、肉眼観察では他の陶器とは明らかに胎土が異なる。おそらく搬入品であろう。碗⑤は体部に鉄絵で2条の帯状の線を描くもの（16）、体部外面に鉄絵を描くもの（19・24）、染付を施すもの（17）、灰釉を塗布するもの（20・23）がある。16は外面に渦兜巾が施されるが、碗⑤の中で、渦兜布が施されるのは16だけである。23・24はやや大振りで、口縁部を欠損する。19・23・24には底部内面に目跡が残る。碗⑥は1点ある（114）。114は外面体部下半付近にヘラ状工具による刻み目があり、丁寧に内外面に灰釉を施す。畳付は無釉である。胎土は他の陶器とよく似ており、肉眼で差異は観察できないが、碗⑥は1点だけであるので、信楽産の搬入の可能性が高いと思われる。そのほか、素焼碗には、碗⑦・⑧がある。碗⑦には11がある。11はやや厚手で、高台内部には渦兜巾がある。碗⑧には22がある。また、碗①'には8がある。8は素焼の底部片で、高台内部がアーチ状を呈する。体部の形状から碗①のような丸形を呈すると思われるが、体部下半から底部しか残っていないので、碗ではなく、香炉または火入れ②の可能性もある。

そのほか、18・25は碗の底部片と窯道具が溶着している。18の碗は内外面に灰釉を施し、底部外面には渦兜巾がある。下部には足付扁平環状円盤が溶着する。また、25は碗または皿で、内外面に透明釉を施す。上部には足付扁平環状円盤が溶着する。

陶器皿とその未製品は87点で、3%を占める。皿は様々な形態がある。①小型で、体部が短く立ち上がり、高台の断面形は四角形を呈するもの、②体部はやや丸みをもつ。見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、高台の断面形は四角形を呈するもの、③口縁部は「く」の字に外反し、見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、高台の断面形が四角形を呈するもの、④体部はやや丸みを帶び、口縁部は玉縁を呈し、高台の断面形が四角形を呈するもの、⑤体部は丸みを帶び、口縁部はゆるやかに外反し、高台の断面形が四角形を呈するもの、⑥体部はやや丸みをもつ。見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、高台の断面形は三角形を呈するもの、⑦口縁部はほぼ直角に立ち上がり、多角形を呈するもの、⑧底部と体部が明瞭に屈曲し、体部はまっすぐに外方にのびるものがある。皿①は口縁端部が部分的に輪花を呈する31・32、口縁部が外反する26がある。31は見込みに染付で人物を描く。32は灰釉を内外面に施す。26は見込みに染付で草を描き、目跡が残る。皿②の口縁部形態には様々なものがあり、口縁部内面に突帯をもつ27や、口縁端部に面をもつ28、口縁端部に面をもち、部分的に輪花を呈する29がある。27は灰釉を施した後、見込みに鉄絵または染付で文様を描く。28・29も鉄絵または染付で、27と同じ文様を描く。28は高台部畳付に窯道具である環状粘土紐が溶着する。29は見込みに蛇の目釉剥ぎが施され、その上には環状粘土紐が溶着する。素焼皿②には41・42がある。41は口縁端部に平坦面をもつ。42は口縁部を欠損する。41に比べると、小振りである。皿③は35・37がある。いずれも灰釉を施す。37は口縁端部を欠損するため不明であるが、35は部分的に輪花を呈する。素焼の未製品では34がある。34も口縁端部は部分的に輪花を呈する。皿④は121がある。121は灰釉または透明釉を

施す。皿⑤は30がある。30は内外面に灰釉を施す。皿⑥は33・36がある。いずれも鉄釉を施す。36の内面見込み蛇の目釉剥ぎ上には磁器片が溶着する。皿⑦は2点ある。122は内面に鉄絵と白色釉で花を描く。皿⑧は素焼の未製品（127）の1点だけである。

陶器鉢とその未製品は11点と少量で、1%以下である。①口縁部が大きく外反し、多角形を呈し、高台の断面形が四角形を呈するもの、②体部丸く、口縁部が玉縁を呈するもの、③半筒形を呈し、口縁部内面が肥厚するものの、④大型、体部ボール状で、口縁端部が平坦なもの、⑤大型、口縁部が「く」の字に外反し、口縁部内面に突帯を施すものがある。陶器鉢①は123がある。123は見込みに鉄絵を施す。鉢②には39がある。39はやや大型で、口径32.0cmを測る。内外面に透明釉を施し、部分的に灰釉を流し掛けする。鉢③には124がある。124は内外面に灰釉を施す。鉢④・鉢⑤はこね鉢である。鉢④は1点だけで、125がある。125は大型で、内外面に鉄釉を施す。鉢⑤も126の1点だけである。大型で、内面に鉄釉を施し、外面上に鉄釉を施したあと、一部灰釉を施す。

陶器汁次は21がある。1点だけである。21は把手を欠損する。内外面に鉄釉を施す。

陶器爛徳利とその未製品は70点で、2%である。47は鳶口を呈し、灰釉の上から部分的に藁灰釉を流し掛けする。そのほか、鳶口を呈するものには灰釉を施した後、イッチン掛けするものが1点あるが、灰釉後藁灰釉を施すものが37点と圧倒的に多い。そのほか、口縁部の形態は不明で、鳶口かどうかわからないが、鉄釉を施すものが24点、鉄釉を施した後にイッチン掛けするものが1点ある。

陶器瓶または徳利とその未製品は47点で、1%である。染付を施すもの、灰釉後藁灰釉を流し掛けするもの、灰釉または鉄釉を施すものがあるが、灰釉を施すものが最も多い。つる首を呈する45は灰釉、46は鉄釉を施す。

陶器蓋物（身）とその未製品は20点で、1%以下である。①体部から口縁部が直線的で、筒形を呈するもの、②体部上部に肩をもち、口縁部が短く直立するものがある。②は口縁端部が無釉で、蓋が付くことは間違いないが、注口をもつ油注ぎの体部の可能性もある。蓋物（身）①には44がある。44は口径5.4cmと小型である。口縁端部は平坦で、無釉である。内外面に灰釉を施す。素焼の蓋物（身）②には43がある。43は体部に鉄絵を施す。

陶器蓋物（蓋）とその未製品は104点で、3%である。蓋物の身と比べて、判別し易いこともある。身より数量が多いものと思われる。①天井部が平坦なもの、②天井部中央が高く、山形を呈するものがある。蓋①は蓋②に比べて、小型である。蓋①51は染付で蝶を描く。52・53は天井部に染付または鉄絵で文様を描く。素焼蓋①には54がある。54は天井部に鉄絵で文様を描く。蓋②には49・50がある。49は天井部に染付で花を描く。50も鉄絵で文様を描く。

陶器土瓶蓋とその未製品は198点と多く、6%である。蓋の形態は①山形を呈する蓋、②落とし蓋の2種類がある。土瓶蓋①・②とも鉄釉・灰釉の両方がある。土瓶蓋①は鉄釉を施すものが1点、灰釉を施すものが25点と、圧倒的に灰釉を施すものが多い。一方、土瓶蓋②は鉄釉が95点、灰釉が25点と鉄釉が多い。土瓶蓋①の57は灰釉、土瓶蓋②の55・56は鉄釉を施す。なお、土瓶では灰釉施釉後にイッチン掛けをするものが2点あったが、蓋ではイッchin掛けをするものは見当たらなかった。

陶器土鍋蓋とその未製品は38点で、1%である。①透明釉を施し、天井部には鉄絵で細線を数条描くもの、②灰釉を施すもの、③鉄釉を施すものがある。鍋蓋①は18点あり、59がある。59は天井部の上部を欠損するため、全体は不明であるが、数条の鉄絵の細線を描く。鍋蓋②は3点、鍋蓋③も2点と少ない。鍋蓋②・③とともに文様が全くないものと、天井部に数条の沈線を施すものがある。素焼の鍋蓋も④文様の無いもの、⑤天井部に数条の沈線を施すものがある。鍋蓋⑤には58のように天井部に沈線を施した後、沈線

と沈線の間の凸部に鉄釉を施すものがある。

陶器土瓶とその未製品は多量に出土した。877点で、26%を占める。土瓶は①体部は丸形または算盤玉形を呈し、体部に鎧の文様を施すもの、②体部は丸形または算盤玉形を呈し、口縁部下に数条の沈線を施すもの、③体部は丸形または算盤玉形を呈し、無文のもの、④体部は丸形または算盤玉形を呈し、灰釉後イッチン掛を施すもの、⑤体部上半はなで肩を呈し、無文のものがある。土瓶①はいずれも外面に鉄釉を施す。229点と最も多い。61は体部上部に1条の沈線、その下には縱方向の鎧を平行に施す。釣手は型成形で、山形を呈し、上辺には刻み目がある。63は体部から底部にかけての破片である。61と同じように体部に鎧を縱方向に施す。底部は上げ底で薄く、外面には環状の溶着痕がある。65は斜め方向や半円状に鎧を施す。土瓶②は鉄釉と灰釉を施すものがある。鉄釉12点、灰釉2点で、鉄釉のほうが多い。62も鉄釉を施す。釣手は61・63と同様、型成形で山形を呈し、上辺に刻み目をもつ。土瓶③は82点ある。60・69・70・71はいずれも灰釉を施す。釣手の形態がわかるものは60だけである。60の釣手も山形を呈するが、上辺には刻み目がない。土瓶④は2点ある。いずれも破片で、全体の形状は不明である。土瓶⑤は64の1点だけである。土瓶①～④と比べると、口縁部の立ち上がりが長い。また、釣手は型成形で山形を呈するが、やや細長で、山形の上辺に刻みは無い。青緑色釉を施す。

陶器土鍋とその未製品は975点で、29%を占める。鉄釉と灰釉を施すものの両方があるが、鉄釉733点、灰釉73点と圧倒的に鉄釉を施すものが多い。74・76は鉄釉、75は灰釉を施す。

陶器行平鍋とその未製品は21点と少なく、1%である。鉄釉と灰釉を施すものがある。鉄釉を施すものは5点、灰釉を施すものは10点である。77は内外面に鉄釉を施す。また、小片であるが、外面に飛鉢を施し、鉄泥を塗布し、内面は灰釉を施すものが3点ある。また、72・73のように素焼の持ち手が6点ある。急須または行平鍋の持ち手であると思われるが、急須の口縁部は見当たらないことから、行平鍋の持ち手の可能性が高い。

陶器香炉または火入れとその未製品は348点で、10%を占める。香炉または火入れは①半筒形を呈するもの、②体部は丸く、頸部は立ち上がり、口縁部は外反するもの、③筒形を呈するもの、④筒形を呈し、碁笥底を呈するものがある。香炉または火入れ①は23点ある。①には透明釉、灰釉、鉄釉を施すもの、染付を施すものがある。この中でも灰釉を施すものが19点と多い。88は透明釉、85・89は灰釉を施す。香炉・火入れ②は86点ある。鉄釉・灰釉を施すものの両方があるが、鉄釉4点、灰釉82点で、圧倒的に灰釉が多い。78は鉄釉、79は灰釉を施す。香炉または火入れ③は最も多く、144点ある。湾曲する鎧を体部全体に施し、鎧凹部には灰釉、凸部には鉄釉を施すもの、鎧を施し、灰釉を施釉するもの、鎧を施し、鉄釉を施釉するもの、鎧を施し、鉄釉を施釉した後、灰釉を施釉するもの、鎧を施し、灰釉を施釉した後、鉄釉を施釉するもの、染付を施すもの、鉄絵を施すもの、灰釉施釉後鉄釉を流し掛けするもの、灰釉だけのもの、鉄釉だけのもの、体部状半に横方向沈線を施し、鉄釉を施釉するものがある。80～82は鎧凹部には灰釉、凸部には鉄釉を施す。83は鎧を施し、鉄釉を施釉する。86は鉄絵を施す。87は鉄釉を施す。この中で最も多いのは鎧を施し、鉄釉を施釉するもので、64点ある。次に多いのは湾曲する鎧を体部全体に施し、鎧凹部には灰釉、凸部には鉄釉を施すもので、53点ある。その他は少量である。香炉または火入れ④は1点で、灰釉を施すもの（84）がある。84は小型である。

灯火具には灯明皿・灯明受皿・灯明受台・ひょうそく・油注ぎ・ろうそく立てがある。この中でも灯明皿が最も多く、未製品を含めると170点出土した。灯明皿はいずれも灰釉を施す。内面に菊花文や「井」・「い」を浮き彫りした円形浮文を貼り付け、斜格子を櫛描し、内面と口縁部外面に薄緑色の灰釉を掛けるものが多い。91は内面に斜格子の櫛描文を描く。一部口縁部を欠損するため、円形浮文の貼り付けの有無

は不明である。97は円錐ピンを間に挟んで、4枚の灯明皿が溶着し、上部には扁平な粘土塊が溶着する。97の上部の灯明皿は菊花文の貼り付けがある。扁平な粘土塊が溶着するため、櫛描文の有無については不明である。

陶器灯明受皿はその未製品を含めると68点出土した。いずれも灰釉を施す。①内面の棧が外縁より低いものと、②外縁よりもやや高いものがある。大半は①である。92は内面の棧が外縁よりも高く、93・94は外縁よりも低い。

陶器灯明受台は4点出土した。灰釉を施すものが3点、鉄釉を施すものが1点ある。

陶器ひょうそくは4点出土した。灰釉を施すものが3点、鉄釉が1点ある。

陶器ろうそく立ては未製品を含めると6点出土した。口縁部がラッパ状に開くろうそく立ては灰釉を施すものが2点、素焼の未製品が4点ある。

陶器の油注ぎと考えられる陶器にはランプ形を呈するものがある。115は注口をもち、灰釉を施す。ランプ形を呈するものはこの1点が出土しているだけで、素焼の未製品も出土していないことから、搬入品の可能性もある。しかし、肉眼での観察では他の陶器と胎土の差異は確認できないので、搬入品かどうか確定しがたい。

陶器水注は把手・体部・注ぎ口が出土した。灰釉が2点と鉄釉が2点ある。

陶器仏飯器はその未製品を含めると14点出土した。95は素焼で、96は灰釉を施す。いずれも底部外面には回転糸切り痕が残る。

陶器甕は未製品を含めると、119点出土した。甕は大型のため、破片の数量も多くなるので、実際の個体数よりも多くなっている可能性が高い。甕には①口縁部が垂下するもの、②口縁部が逆L字状を呈するもの、③体部から口縁部がほぼ直線的で、口縁端部に刻み目を巡らすもの、④縦方向に鎬を施すものがある。甕①には灰釉を全体に施した後、一部に藁灰釉を施すもの(101)、鉄釉を施した後、一部に藁灰釉を施すものが各1点ずつある。いずれもやや小型である。甕②は鉄釉を施すものが多い。98は体部上半には横方向に沈線を数条巡らせ、内外面に鉄釉を施す。その他、灰釉を施釉した後、肩部に鉄釉を流し掛けするものが1点ある。甕③には100がある。体部から口縁部がほぼまっすぐで、口縁端部に刻み目を施す。内外面に透明釉を施釉後、口縁部内外面に銅緑釉を施す。甕④は5点ある。いずれも、体部片である。透明釉施釉後一部に藁灰釉を流し掛けする。

陶器水甕はその未製品を含めると、10点出土した。流水状の陰刻文様と刺突文を施し、灰釉を施釉した後鉄釉や銅緑釉を流し掛けするものが6点、素焼の未製品が4点出土した。102は全面に灰釉、体部の一部に銅緑釉を施す。

六角壺はその未製品を含めると6点出土した。103は口縁部破片で、全体は不明であるが、灰釉を施したあと、口縁端部の一部に鉄釉、体部の一部に藁灰釉を施す。

植木鉢は7点出土した。口縁部形態がわかるものはいずれも逆L字状に外反する口縁部をもち、体部は直線的で、底径は口径よりも小さい。この形態の植木鉢は一般的に蘭鉢と呼ばれるものである。植木鉢の外面の文様は、外面に鉄絵を描くもの、体部上半に鉄釉を帯状に巡らすもの、体部上半に突帯をもち、灰釉を施すもの、灰釉施釉後鉄釉を流し掛けするものがある。

土管は1点出土した。117は破片であるが、「焼物」という文字がヘラ書きされている。さぬき市歴史民俗資料館に所蔵されている「寛政十一己未寒川郡富田西村 烧物師助三郎焼」のヘラ書きがある土管と字体が一致している。また、同じ字体で「寒川」のヘラ書きをもつ土管が吉金窯跡からも出土している。

磁器は器種が特定できないものを含めても61点と少ない。全破片数の1%未満である。磁器には碗・皿・

蓋などがある。碗は25点ある。①丸碗、②広東形碗、③端反碗、④筒端反碗、⑤青磁染付碗がある。碗①は5点ある。105は口縁部外面に四方櫛文を描き、体部には樹木を描く。②は3点ある。107は底部片である。③は136だけである。④も137だけである。137は底部内面に染付で蝶の文様を描く。焼成がやや甘く、陶質に近い。⑤は156だけである。内面はコンニャク印判で五弁花文を描く。搬入品の可能性が高い。106は碗であるが、口縁部片で全体の形態は不明である。内面に四方櫛文、外面に蝶の文様を描く。

磁器蓋は丸碗の蓋が2点ある。138は内外面に蕪の文様を描く。

磁器皿は25点出土した。①口径13~15cm前後、体部はやや丸みをもつもの、②口径20~25cm前後、口縁部端反で口縁端部が肥厚する皿、③口径20~25cm前後、口縁端部は輪花を呈するもの、④口径10cm前後、体部やや直線的で見込蛇の目釉剥ぎする皿、⑤角皿がある。皿①は10点ある。この中で蛇の目凹形高台を呈するものは5点ある。108は内面を圈線で区画し、扇文を描く。そのほか、蛇の目凹形高台ではなく、輪高台で、畳付のみ無釉のものが3点ある。皿②は7点ある。内面には竹を描き、外面には源氏香を描くもの（111）や、外面は唐草文を描き、内面には墨彈きで唐草文を描くもの（110）がある。いずれも底部まで残っていないが、112のような蛇の目凹形高台であると思われる。皿③は1点ある。139は内面に蝶の文様を描く。皿④は3点ある。109は内面に二重格子文を描く。皿④も吉金窯跡でみられる。平尾窯跡出土の皿④で、底部の残っているものはみられないが、おそらく吉金窯跡出土磁器皿（24）のような断面四角形の高台が付くものと考えられる。

窯道具はさまざまなものがある。トチン・円錐ピン・環状粘土紐・弧状粘土紐・棒状粘土紐・L字状粘土紐・足付扁平環状円盤・扁平環状円盤・扁平円盤・足付扁平円盤・ボタン状円盤・扁平粘土・サヤ鉢・焼台・逆台形ハマ・敷板・チャツ・タコハマ・シノがある。トチンは①円柱状と、②四角柱状のものがある。トチン①は9点、②は2点出土した。円錐ピンはいずれも直径1cm前後である。92点ある。環状粘土紐は直径6~10cm前後で、8点出土した。弧状粘土紐は146点あるが、この中には環状粘土紐の両端を欠損するものも含まれていると思われる。棒状粘土紐2点、L字状粘土紐は1点ある。足付扁平環状円盤は扁平なドーナツ状の円盤に円錐ピンが付いたもので、円盤の両面には回転糸切り根がみられる。70点ある。足の付かない扁平環状円盤も12点ある。中央部に穴のない扁平円盤は23点ある。直径4~8cm前後である。扁平円盤に足の付いた足付円盤は1点ある。ボタン状円盤は直径1cm前後の円形浮文状の扁平な粘土塊で、3点ある。指押さえ痕の顯著な扁平粘土塊も3点ある。サヤ鉢は59点ある。体部に四角形の切れ込みを持つものと、持たないものがある。118は香炉または火入れが溶着する。サヤ鉢の口縁部には環状粘土紐を置き、その上にサヤ鉢を載せている。焼き台は2種類ある。①天井部は平坦で、天井部に最大径をもち、天井部径20~30cmを測り、側面は内側に湾曲するもの、②浅い鉢を逆に置いた形態で、下部に最大径をもつ。下部径8~13cmで、天井部に孔があく。①は少なく2点であるが、②は193点と多い。逆台形ハマは浅い皿形を呈し、中実で天井部に平坦面をもつもので、①直径10cm以上のもの、②直径6~8cmのものがある。逆台形ハマ①は中央部に孔があるものが3点、孔がないものが1点ある。②は2点ある。敷板は2点ある。152は短辺11cm、厚3cmを測る。上部には環状粘土紐が溶着する。チャツは浅い碗のような形態で、1点出土した。タコハマは2点出土した。いずれも4枚の羽をもつ。シノは扁平な円盤に脚部が付いた形態である。1点出土した。

ヘラ描きまたは押印のある陶磁器や窯道具も少量ある。鉄釉施釉の土瓶または土鍋の底部（69）には□の中に斜線のある印がみられる。吉金窯跡出土遺物にも同一の印がある。そのほか、ヘラ描きのある陶磁器片がある。陶器水甕（116）の底部外面に「秀印」、素焼の底部（158）には「民」のヘラ描きがある。窯道具では「山」をヘラ描きする扁平環状円盤（159）がある。同じヘラ描きは吉金窯跡扁平環状円盤（132）

にもある。トチン（141）には円を2つ上下に重ねた団子状のヘラ描き、シノ（155）には大きな円のヘラ描きがある。サヤ鉢（104）の体部には三角形の山の下に「市」のヘラ描きがある。土管（117）には「焼物」のヘラ描きがある。以上のようなヘラ描きや印銘がみられるが、破風「高」を押印した陶器片は確認できなかった。

4. 平尾窯跡出土遺物の特徴と吉金窯跡出土遺物

平尾窯跡から出土した陶磁器はいつ頃生産されたものであろうか。出土陶磁器の中には他地域の窯で生産された搬入品も混じっていると考えられるが、ここでは平尾窯跡から出土した陶磁器の生産時期の検討を器種ごとに行う。

まず、陶器について検討を行う。陶器・陶器未製品は全破片の91%を占めることから、磁器に比べると、長期間生産していたことが推定される。

碗①の中で、鉄絵で唐草文を描く碗と灰釉を施す碗に類似する碗は長崎県皿山本登窯跡2T11層～2層でも出土している。皿山本登窯跡出土資料は1780年代から1810年代に位置付けられている⁽⁵⁾。また、碗①の中で、鉄絵で唐草文を描く碗と灰釉を施す碗は吉金窯跡にもある。吉金窯跡では碗①の灰釉を施す碗と灯明皿がサヤ鉢に溶着した資料がある。この灯明皿は平尾窯跡出土灯明皿（97）とほぼ同形態で、18世紀末から19世紀前半に比定されることから、陶器碗①は18世紀末から19世紀前半に製作されたものと推定される。碗③の広東碗は肥前では1780年代から19世紀前半に比定されていることから、同時期のものであろう。碗④は京・信楽で多量に生産される小杉碗を真似たものである。碗④の中で口縁部まで残っているものはないが、12・13は口径11cm前後で、12は梅が、13は松の枝と葉が鉄絵で丁寧に描かれている。また、14は松が数本の直線だけで描かれており、口径9cm前後である。15は文様の有無は不明であるが、14同様口径9cm前後と推定される。江戸遺跡の出土例では口径11cmの大振りのものは17世紀末～18世紀初頭に出現し、体部の根引き松の文様は鉄と呉須を使い、丁寧に描かれている。18世紀後半になると、口径9cm前後と小振りになり、文様も雑で鉄絵のみとなる⁽⁶⁾。12・13はやや大振りで、13の体部に描かれている松も退化していないことから、18世紀代のものと考えられる。また、14は小振りで、松も雑であることから18世紀後半頃のものと考えられる。なお、12のような梅の文様をもつ小杉碗は信楽では例がない。碗⑤の筒形碗は信楽にも同形態の碗がみられる。滋賀県信楽町勅旨53-1号窯や牧17号窯では鉄絵で2本線を描くものがみられる。16は19・20に比べて、底部が分厚く、外面には11・18と同方向に廻る渦兜布がある。碗⑤の中でも渦兜布があるのは16だけであることから、信楽からの搬入品の可能性もある。信楽では勅旨53-1号窯は18世紀半ば、牧17号窯は19世紀初頭に位置付けられている⁽⁷⁾。16は搬入の可能性もあるが、碗⑤は18世紀半ばから19世紀初頭のものであると考えられる。碗⑦は2点出土した。いずれも素焼である。吉金窯跡でも碗⑦は2点みられる。いずれも焼成不良で、釉薬は明瞭ではないが、底部外面以外に灰釉または藁灰釉が施される。信楽でも黄瀬27号窯で出土している。黄瀬27号窯では凸凹碗として報告され、底部外面以外にやや緑かかった透明釉が施される。信楽では黄瀬27号窯は18世紀半ばに比定されている⁽⁷⁾。

皿の中で最も多い皿②・③は見込み蛇の目釉剥ぎを施す。皿②の28は高台畳付に環状粘土紐が溶着する。29は蛇の目釉剥ぎ上に環状粘土紐が溶着しており、蛇の目釉剥ぎ上に環状粘土紐を置いて皿を重ねたことがわかる。また、吉金窯跡でも皿②・③は出土しており、蛇の目釉剥ぎ上に環状粘土紐が溶着する皿がある。見込み蛇の目釉剥ぎは肥前など九州ではみられるが、九州では環状粘土紐を使用せず、蛇の目釉剥ぎ上に環状粘土紐を重ねることはしない。京・信楽・瀬戸では環状粘土紐を使用しており、輪ドチと呼ぶ。

鉢②は吉金窯跡にもある。吉金窯跡50は鉄釉が流し掛けされ、見込みには目跡が残る。平尾窯跡39は底部が残っていないため、目跡の有無は不明であるが、鉢②の底部と推定される40には目跡が残る。

燭徳利は鳶口で、灰釉の上に藁灰釉を施す。このような燭徳利は吉金窯跡でも出土している。信楽での鳶口の燭徳利の出現は19世紀半ばであることから、燭徳利は19世紀半ば以降のものと考えられる。

鍋蓋は信楽で18世紀後半に出現する⁽⁸⁾。特に鍋蓋⑤の天井部に数条の沈線を施すものは信楽では18世紀後半に位置付けられることから、58は18世紀後半のものと考えられる。

香炉・火入れ③の中で、湾曲する鎬を全体に施し、鎬凹部には灰釉、凸部には鉄釉を施すものは信楽もしくは瀬戸・美濃でも製作されている。京都府京都御所東方公家屋敷群跡では18世紀末から19世紀前半の遺構から出土している⁽⁹⁾ことから、18世紀末から19世紀前半頃のものと考えられる。

灯明皿・灯明受皿は信楽では18世紀後半頃から生産される⁽¹⁰⁾ことから、18世紀後半以降のものと考えられる。灯明皿の中には「い」・「井」が陽刻される円形貼り付け文をもつものがある。この貼り付け文は吉金窯跡でもみられる。

行平鍋は18世紀末頃から出現する。この中で飛鉋を施すものは19世紀代のものと考えられる。飛鉋を施す行平鍋は吉金窯跡でも出土している。

115はランプ形を呈するが、同形態のものは信楽町漆原C遺跡でも出土している。漆原C遺跡は幕末から明治中頃まで操業していたと考えられている。平尾窯跡では明治時代の遺物はほとんど出土していないので、115は幕末頃のものであろう。

水甕・六角壺・甕④は瀬戸製品とよく似ている。水甕・六角壺の素焼が出土していることから、搬入品ではなく、瀬戸製品を模倣して製作したものに間違いない。水甕102・116は刺突が省略されておらず、瀬戸では18世紀後半から19世紀初頭に位置付けられる。102・116も同時期のものと考えられる。六角壺103は瀬戸では19世紀前半に位置付けられる⁽¹¹⁾ことから、103も同時期のものと考えられる。吉金窯跡でもこのような瀬戸製品の模倣品は出土している。

このように、平尾窯跡から出土した陶器は18世紀後半から幕末頃のものであるが、この中でも18世紀後半から19世紀前半のものが多い。18世紀後半のものは碗・皿が多く、信楽や九州の影響を受けたものが認められる。19世紀代のものは信楽や瀬戸の影響がみられる。また、平尾窯跡出土陶器の大部分の種類は吉金窯跡でも出土している。しかし、吉金窯跡のほうが碗の形態が多種であるなど、吉金窯跡のほうが陶器の種類が多い。また、吉金窯跡では高松藩のお庭焼である理兵衛焼の印銘である破風「高」を押印する陶器片が出土しているが、平尾窯跡ではみられなかった。

次に、磁器について検討を行う。碗①・②ともに肥前でも同じ形態の碗がある。肥前の年代観では碗①の丸碗は18世紀第4四半紀、碗②の広東形碗は1780年代から19世紀前半代に位置付けられる。碗①105の体部に描かれる樹木の文様（五葉松か？）をもつ碗は吉金窯跡でもみられる⁽³⁾。また、碗②の広東形碗も吉金窯跡にもある。106の外面の文様である蝶は吉金窯跡出土遺物の磁器蓋（13）の内面にも描かれる。この蝶の文様は肥前には見当たらないが、筑前須恵焼には同じような蝶の文様がある⁽¹²⁾。なお、吉金窯跡では口縁部が端反で、細線で雲竜文を描く碗（11・12）が出土しているが、平尾窯跡ではみられなかった。丸碗蓋（138）には蕪の文様が描かれるが、吉金窯跡でも同文様の蓋がある。

磁器皿①・②ともに吉金窯跡でもみられる。皿①は肥前にも同形態の皿があり、18世紀末から19世紀初頭に比定される。111は外面に源氏香、内面に竹を描くが、吉金窯跡にも類似する文様をもつ皿がある。このような文様は肥前にはみられないが、筑前須恵焼には同じ文様をもつ皿がある。

このように磁器は18世紀第4四半紀から19世紀前半代に生産されたものと考えられるが、磁器片の出土

量は61点と非常に少ないとことから、平尾窯跡で磁器を焼成したのは数回程度であると考えられる。また、陶器皿33・36の見込みには磁器片が溶着していることから、磁器と陶器を重ねて、いっしょに焼成したと思われる。なお、磁器に描かれた文様から、肥前だけではなく、筑前須恵焼の影響を強く受けていることがうかがわれる。

窯道具については肥前など九州で使用されるものと、信楽または瀬戸で使用されるものの両方がある。九州で使用され、信楽では使用されないものには、タコハマ・チャツ・シノ・逆台形ハマがある。また、逆に信楽または瀬戸で使用され、九州で使用されないものには焼台・環状粘土紐（信楽・瀬戸では輪ドチ）・足付扁平環状円盤（瀬戸では足付輪ドチ）・敷板がある。しかし、29のように見込み蛇の目釉剥ぎの上に環状粘土紐を重ねていることから、窯道具の使用方法まで忠実に模倣しているとは言い難い。なお、これらの窯道具も吉金窯跡でも出土しており、種類の差異はみられない。また、159は扁平環状円盤で、「山」のヘラ描きがあるが、吉金窯跡でも「山」のヘラ描きをもつ扁平環状円盤が出土している。

以上のように、平尾窯跡から出土した陶器は18世紀後半から幕末頃とかなりの時期幅があるが、この中でも18世紀後半から19世紀前半のものが多い。磁器については18世紀後半から19世紀前半のものが多い。陶磁器や窯道具は吉金窯跡でも同じ種類、形態のものが出土しているが、吉金窯跡のほうが陶器・磁器とともに種類が多い。陶器の中で皿や碗の一部については18世紀後半から19世紀前半の肥前や筑前、信楽製品とよく似ている。そのほか、燭台・土鍋・行平鍋・土瓶・灯火具は18世紀後半から幕末の信楽製品、水甕・六角壺は18世紀後半から19世紀前半の瀬戸製品、磁器は18世紀末から19世紀前半の肥前・筑前の製品によく似ていることから、これらと同時期のものと考えられる。

3. 富田焼の陶工と平尾窯跡の操業

富田焼の陶工について以前紹介した⁽³⁾が、再度ここで紹介する。富田焼の陶工には赤松松山（1739～1821）、富永助三郎（1775～1837）、民山等がいる。富田焼の陶工の研究は松浦正一氏⁽¹³⁾や豊田基氏⁽¹⁾が行っている。松浦氏が調査した富田焼に関する資料の中で最も古い記録は赤松家に伝わる古記録である。松浦正一氏は赤松家の位牌や、自性院（現在のさぬき市志度町）に残る過去帳、赤松家に残る古記録を調査し、筆写した⁽¹⁴⁾。赤松家に残る記録によると、天明元年（1781）12月29日に志度にあった赤松家が火災で全焼し、その後富田村の「藩公の窯跡」で「唐津焼」を焼き、富田の亀田屋恒蔵といっしょに焼物を焼いた。寛政元年（1789）、恒蔵と別れて、寛政8年（1796）筑前末村の権平の孫権助を雇い入れ、赤松松山の弟赤松松林、赤松入山といっしょに製陶を行ったことが記されている⁽¹⁵⁾。そのほか、松浦氏の筆写資料の中で、寛政8年（1796）に赤松伊助が浦役人中様あてに書いた「奉願上口上」にも加須谷郡末村権助に陶業を習ったことが記されている⁽¹⁶⁾。赤松松山は赤松家の3代目の焼物師で、初代は赤松弥右衛門（1684～1744）、2代目は弥右衛門の長男の赤松清兵衛（号道順、1711～1781）、弥右衛門の長男が松山（本名伊助）、次男が松林（本名忠左衛門 1821没）、三男が讚窯入山（本名新七 1823没）である。初代の赤松弥右衛門は筑前末村権兵衛を雇い入れ、清兵衛は元文3年（1738）権兵衛から陶器術を会得した。赤松松山の雇い入れた末村権助はこの権兵衛の孫に当たる。

また、富田焼の陶工富永助三郎は高松藩の御用焼き物師である紀太家と密接な関係がある。紀太家は2代目以降高松藩に召抱えられ、御用焼き物師となった。4代目行高は藩命により、寒川郡神前村（現在の香川県さぬき市神前）の庄屋蓮井家の次男伊三郎を養子とした。この蓮井家は吉金窯跡の北方200mに位置する。元文2年（1737）、伊三郎は5代目紀太弥助惟久となつたが、実子がなく、実家蓮井家の親類である寒川郡鴨部中筋村百姓五郎兵衛の息子を養子として迎え、6代目としたが、すぐに病死した。その後、

寒川郡富田西村富永助三郎弟弟子筋の者を養子とし、この養子は寛政4年（1792）、7代目紀太三千歳惟持⁽¹⁷⁾となった。7代目の死後、文化10年（1813）惟持の実子の紀太理兵衛惟晴は8代目となり、焼物の後見を叔父である富田村焼物師富永助三郎が行った。

そのほか、平賀源内の弟子で、源内焼に関わった陶工の1人である珉（民）山がいる。珉（民）山は安永9年（1780）志度で製陶を始めており、緑・黄・白色の三彩風の型物陶器を作成した⁽¹⁸⁾。「民山」を押印する型物陶器の素焼の未製品は吉金窯跡で出土している。

これらの富田焼の陶工は平尾窯跡でも製陶を行ったのであろうか。先述のように平尾窯跡からは「焼物」とヘラ描きのある土管（117）が出土した。この土管と同じ字体のヘラ描きのある土管がさぬき市歴史民俗資料館に収蔵されている。この土管の出土地は不明であるが、「寛政十一己未 寒川郡富田西村 焼物師助三郎焼」というヘラ描きがある。この「助三郎」とは富永助三郎（1775～1837）のことである。吉金窯跡でもこのヘラ描きと同じ字体の「寒川」というヘラ描きのある土管片（124）が出土したことから、吉金窯跡や平尾窯跡でも富永助三郎が土管を焼いていたことがわかる。ヘラ描きにある寛政11年（1799）は助三郎の弟弟子である三千歳惟持（または千歳惟持）が7代目理兵衛として活躍していた頃である。

民山については吉金窯跡から「民山」の印銘をもつ皿の未製品が出土しており、吉金窯跡で作陶を行ったことがわかる。平尾窯跡から「民」のヘラ描きのある素焼鉢片（157）が出土している。破片のため、「民」の一字しか確認できないが、「民山」の「民」かもしれない。

そのほか、富田焼に関わっていた陶工として、筑前末村出身の権助がいる。赤松家に残る古記録には寛政8年（1796）筑前末村出身の陶工権助を雇い入れたことが記されている。筑前末村は現在の福岡県糟屋郡須恵町のことである。宝暦元年（1751）から明治35年（1902）に須恵焼が焼かれたところである。記録から肥前陶工を雇い入れていたことが判明しており⁽¹⁹⁾、須恵焼は肥前の影響を受けたことがわかる。吉金窯跡・平尾窯跡出土陶磁器をみると肥前や須恵焼の影響が各所にみられる。吉金窯跡出土の磁器皿（23）・平尾窯跡出土磁器皿（111）のように口縁部が玉縁で、内面には竹、外面には源氏香を描く皿は須恵焼にもある。また、吉金窯跡磁器碗（6・9）の見込みに描かれた蝶、平尾窯跡出土磁器碗（106）の体部に描かれた蝶と同じ文様が須恵焼にもある。技法の共通性からも須恵焼の陶工権助⁽²⁰⁾が富田焼の製陶に関わっていたという古記録は非常に信憑性が高いものと考えられよう。

出土遺物から陶工の名前のわかる資料として、平尾窯跡出土陶器水甕（116）がある。116は瀬戸の水甕をまねたものであるが、この底部には「秀印」というヘラ描きがある。この水甕を製作した陶工の名前を示すものであると思われる。「秀」の字を使用する人物は富永助三郎の従富永秀八がいる⁽²¹⁾。秀八の名はさぬき市富田中にある富田神社の玉垣にもある。この玉垣は文化4年（1807）に寄進されたもので、「秀八」と「玄藏」の名が横並びに彫られている。また、別の玉垣には「権助」⁽²²⁾と彫られている。陶器水甕（116）は18世紀後半から19世紀初頭の作風であることからも、「秀印」は富永秀八のヘラ描きである可能性が高いのではなかろうか。

4. おわりに

以上のように、平尾窯跡出土遺物の紹介と、吉金窯跡出土遺物との対比を行い、窯の操業期間や富田焼との陶工との関わりを推測した。平尾窯跡は18世紀後半から幕末頃まで操業していたと考えられる。ここで焼かれた陶磁器は信楽の影響を受けたものが多いが、18世紀後半から19世紀前半の陶磁器の一部は肥前や筑前須恵の陶磁器、瀬戸の影響を受けたものがある。肥前・筑前の影響を受けた陶磁器は寛政8年（1796）雇い入れた須恵焼の陶工である筑前末村権助の指導のもとに製作したものであろう。なお、大部

分の陶器は信楽の影響を強く受けていることから、赤松松山、松林、入山、富永助三郎をはじめとする陶工は信楽製品をお手本として陶器を製作した可能性が高い。また、平尾窯跡からは理兵衛焼の印銘である破風「高」は出土していないことから、高松藩の御用焼き物師である紀太理兵衛が平尾窯跡で陶器を焼いたとは考えにくいが、平尾窯跡から出土した陶磁器・窯道具は吉金窯跡でも同形態・同文様のものがみられ、同じヘラ記号を施す陶器や窯道具が出土していることから、平尾窯跡で陶磁器を焼いた陶工が吉金窯跡でも陶磁器を焼いたものと考えられる。

以上のように推論したが、富田焼の陶工についての資料は数少ない。特に、瀬戸の作風をもつ水甕の底部の「秀印」のヘラ描きは今後とも調査を続け、富永秀八のヘラ描きかどうかの手がかりをつかみたい。また、先年紹介した吉金窯跡出土資料は資料全体のごく一部を紹介しただけであるので、吉金窯跡ではどのような陶磁器を量産化していたのか不明瞭である。今後とも、これらの調査を行い、吉金窯跡・平尾窯跡の築造の経緯や操業、高松藩とのかかわりについて検討していきたい。

最後に、本稿を成すに当たり、さぬき市教育委員会、さぬき市歴史民俗資料館には快く資料の閲覧をさせていただき、便宜を図っていただきました。また、稻垣正宏氏、畠中英二氏、山下啓之氏、高山慶太郎氏、千葉幸伸氏、正木英生氏、調査に参加された六車恵一氏、溝渕茂樹氏には数々のご教授をいただきました。記して、感謝申し上げます。

- 註1 豊田基「東讃の古窯に関する研究—特に富田焼について—」『文化財協会報』特別号7 香川県文化財保護協会 1965
豊田基「陶業」『大川町史』1978
豊田基「讃岐のやきもの」『日本やきもの集成』10 1982
松浦正一『讃岐陶磁器史稿』香川縣立志度商業學校 1934
- 2 豊田基「陶業」『大川町史』1978
3 藤本史子「富田焼とその流通」『郷土研究 資料集』No.26 大川町文化財保護協会編 2001
森下友子「近世の富田焼－吉金窯跡出土遺物－について」『財團法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要X』財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 2002
4 六車恵一「香川県」『日本考古学年報』21・22・23 1981
5 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000
6 鈴木裕子「江戸遺跡出土の信楽焼」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁器史研究会 2001
7 畠中英二『信楽焼の考古学的研究』2003
8 角谷江津子「京都における信楽焼の流通と京焼」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁器史研究会 2001
9 能芝勉「京都市内出土の近世陶磁器—近年の一括出土資料—」『関西近世考古学研究IX』2001
10 角谷江津子「京都における信楽焼の流通と京焼」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁器史研究会 2001
畠中英二「近世信楽に於ける陶器生産」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁器史研究会 2001
11 藤澤良祐『瀬戸市史』陶磁史篇6 1998
12 『筑前の磁器 須恵焼』須恵町教育委員会・須恵町歴史民俗資料館 1981
13 松浦正一『讃岐陶磁器史稿』香川縣立志度商業學校 1934
14 松浦正一氏は富田焼だけではなく讃岐の焼物全般に関する資料を調査し、調査資料を2冊に製本し、それぞれ『讃岐陶磁器史資料一』・『讃岐陶磁器史資料二』と表題を付けた。松浦正一氏の没後、これらの資料はご家族によって瀬戸内海歴史民俗資料館に一括寄贈された。瀬戸内海歴史民俗資料館では『歴史収蔵資料目録13 松浦正一文庫目録』(1989) として目録を出版した。
15 「…其後、天明辛丑年（元年）十二月廿九日不幸出火にて全焼に逢ひ後富田村なる藩公の窯跡にて唐津焼取立仰付けられ焼出し其後同地の亀田屋恒蔵と共に焼き後寛政酉元年恒蔵と分離し寛政戌年五月又右の窯跡にて独立し寛政辰年（八年）、筑前賀須谷郡末村権平孫権助を雇ひ入れ松林入山両名の弟も手伝ひたり（此当時の作品を茲に富田焼として愛玩せらる）其の後志度浦に帰りて家督を息宇吉に譲りて焼をも初めたり時に享和三年なり 富田の銘あるいは松山寛政年間富田にて製作せしものなり又唯松山造とあるは勿論此の人の作品なり」（『讃岐陶磁器史資料一』

16

奉願上口上

一 私所作之焼物商事他所江ハ不向ニ而渡世之
便ニ成兼申候然所此度所縁之者筑前賀須
谷郡末村權助義上方江作上持ニ參候序
私方江罷越候右之者唐津焼仕馴居申候
ニ付暫指置焼方習取候様仕度奉願上候
程能出来他所売ニも相加候得者渡世相
以
統仕御慈非難有可奉在候此段宣敷仰
上可被下候以上

志度浦水夫件焼物師

寛政八

伊助

辰四月日

御浦役人中様 (『讃岐陶磁器史資料 一』瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵)

- 17 紀太家には由緒書は2冊あるが、『紀太家由緒書 一』では三千藏惟持、『紀太理平焼物 由緒書 式』では千藏惟持とある。
- 18 豊田基「讃岐のやきもの民山」『さぬき美工』第36号 1966
- 19 高山慶太郎「筑前の磁器『須恵焼』」須恵町立歴史民俗資料館 in Web 2005
- 20 陶工権助や、陶工が高松藩に出向いたという記録は須恵焼の資料中では見つかっていない。
- 21 豊田瓠庵『陶工庸八』1970
- 22 権助は筑前末村出身の陶工権助のことであろう。



図1 平尾窯跡位置図（約1/16000） 国土地理院地形図1/25000 志度を使用

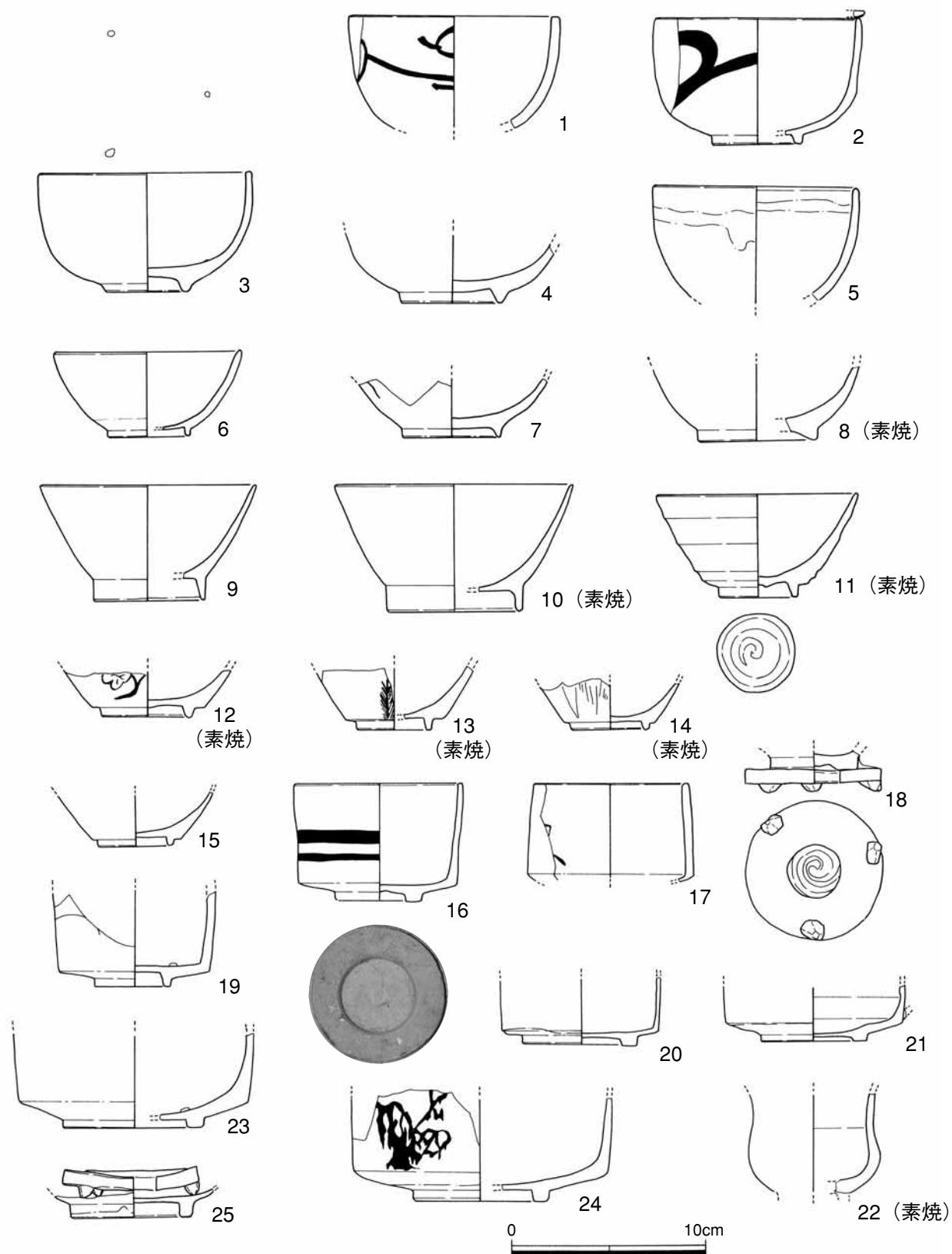


図2 平尾窯跡出土遺物1 (1/3)

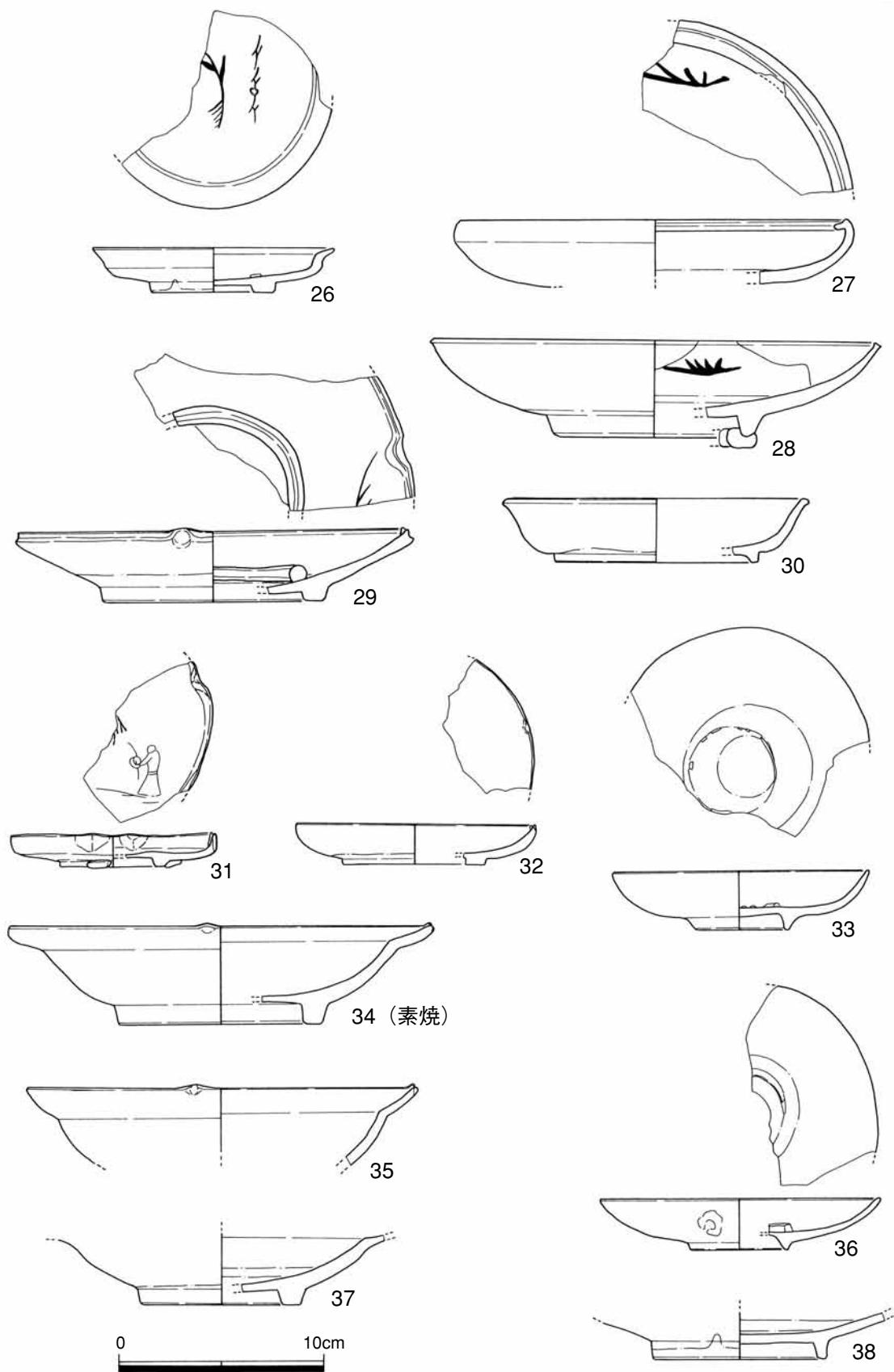


図3 平尾窯跡出土遺物2 (1/3)

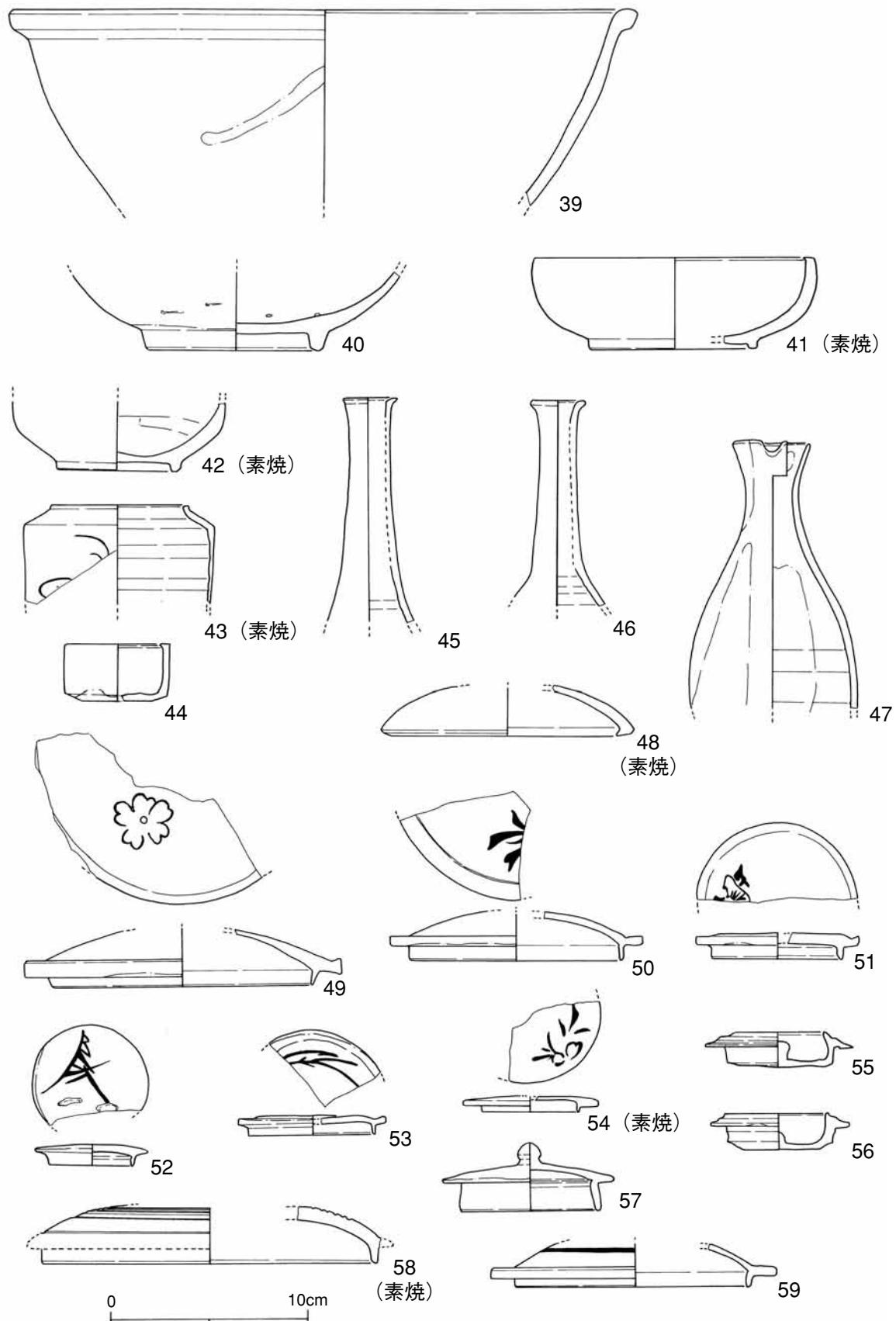


図4 平尾窯跡出土遺物3 (1/3)

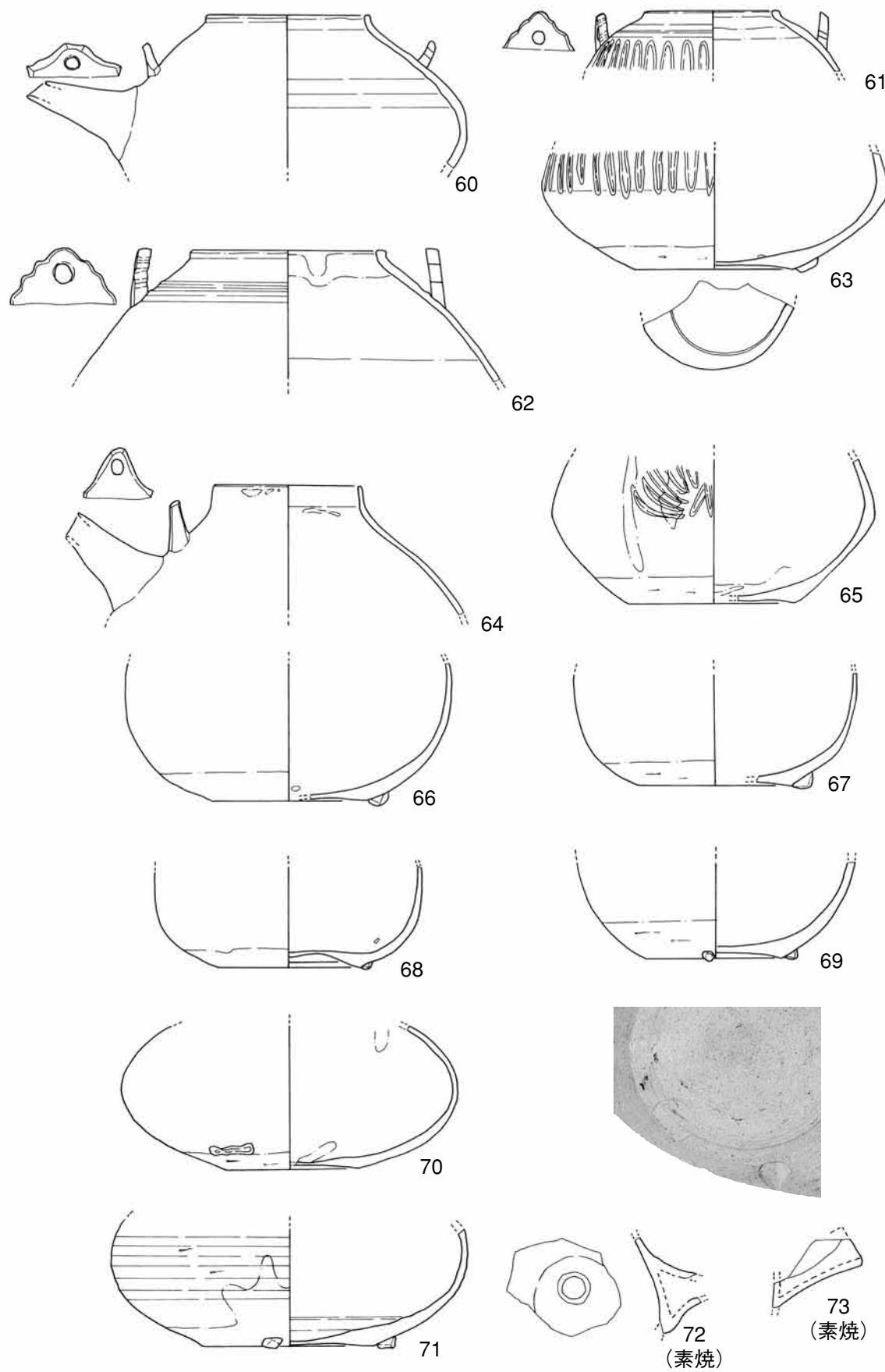


図5 平尾窯跡出土遺物4 (1/3)

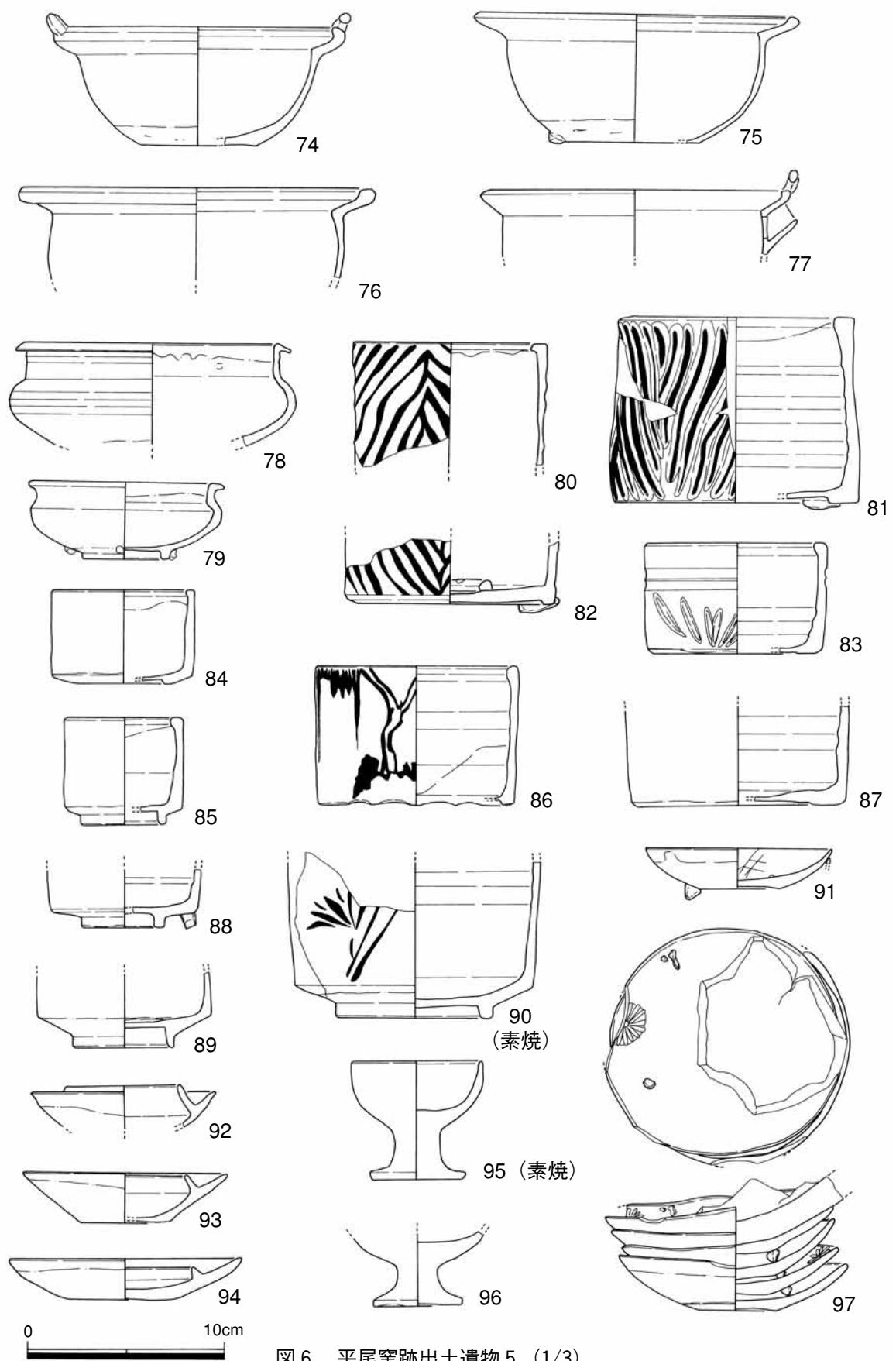


図6 平尾窯跡出土遺物5 (1/3)

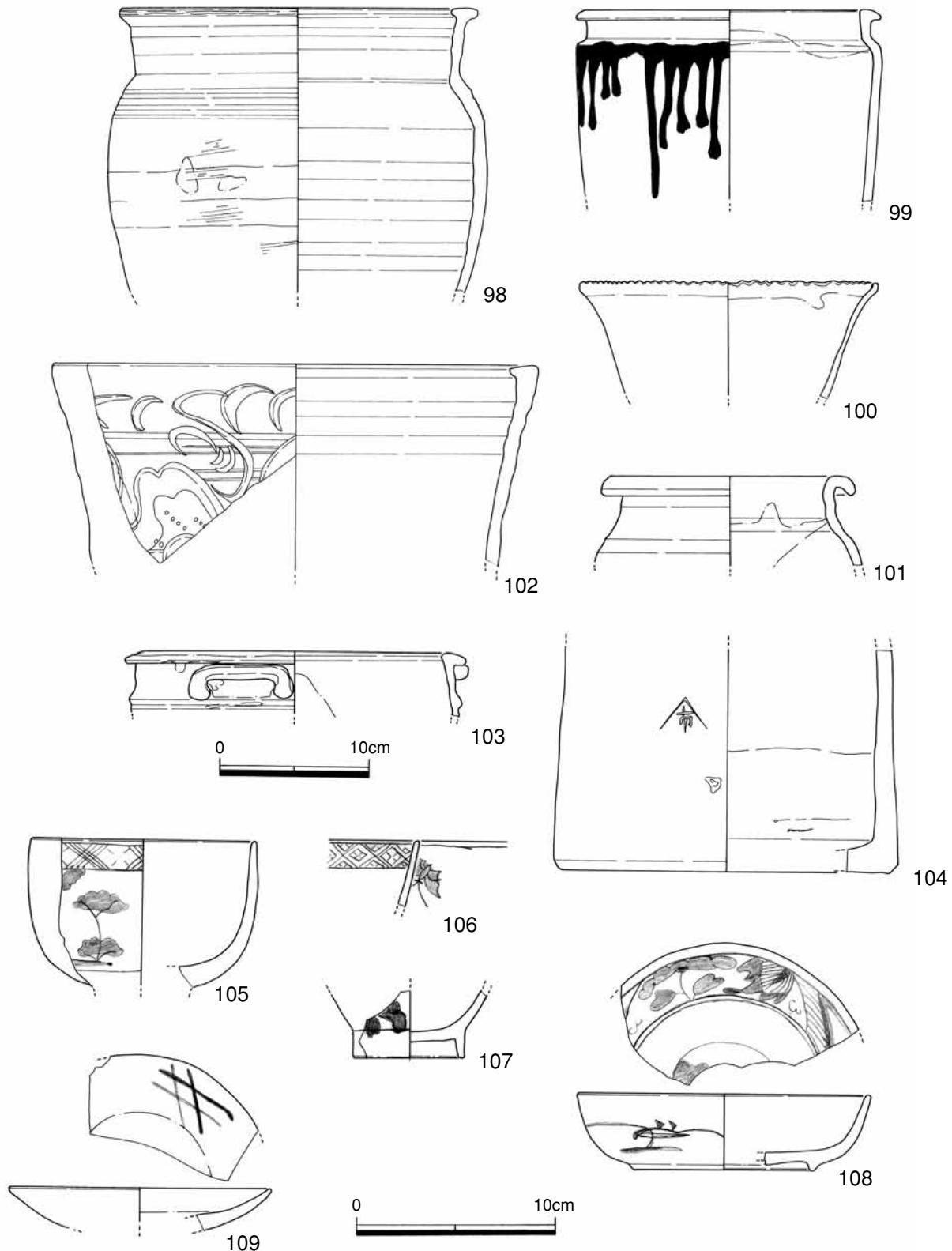


図7 平尾窯跡出土遺物 6 (1/4・1/3)

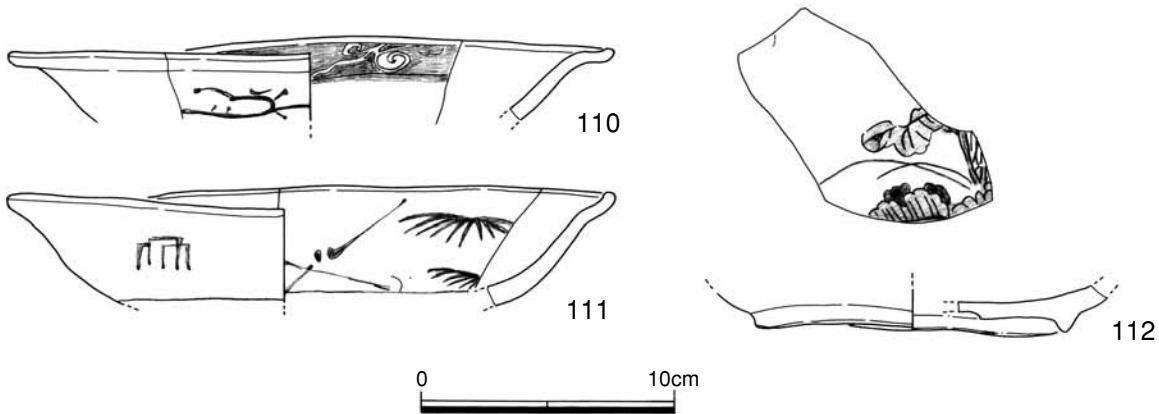


図8 平尾窯跡出土遺物7 (1/3)

表1 平尾窯跡出土遺物の種類と数量

種類	破片数	割合
陶器・陶器未製品	7950	91%
磁器	61	1%未満
窯道具	677	8%
明らかに平尾窯跡以外で生産された陶磁器等	62	1%未満
合計	8750	

表2 器種が特定可能な陶磁器

種類・器種 陶器あるいは陶器未製品(種類が特定可能なもの) 3318点	碗	陶器 碗	形態・施釉などの特徴			破片数 合計	窯道具・明らかに平尾窯跡以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合	窯道具・明らかに平尾窯跡以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合
			①	腰が張る丸形碗	藁灰釉 口縁部のみ緑色釉 灰釉 鉄釉 鉄絵唐草文 透明釉			
			②	腰の張りが少なく、口縁部が外方に向かって開く丸形碗	鉄絵 灰釉	1	64	2 %
			③	広東形碗		4		
			④	底部と体部が明瞭に屈曲し、体部から口縁部はまっすぐにのびる碗(いわゆる小杉碗)		4		
			⑤	筒形碗	鉄釉 鉄絵または染付 鉄絵による帯状の線 灰釉	4 11 8 11		
			⑥	端反形を呈し、体部外面に亀甲形の面取りをする碗		1		
			素焼 碗	腰が張る丸形碗		3	40	1 %
				丸形碗? 高台内部上げ底(高台製作途中か?)		2		
				広東形碗		3		
				底部と体部が明瞭に屈曲し、体部から口縁部はまっすぐにのびる碗(いわゆる小杉碗)		5		
				筒形碗		18		

種類・器種			形態・施釉などの特徴			破片数	破片数 合計	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合
陶器あるいは陶器未製品 (種類が特定可能なもの)	碗	素焼 碗	⑦ 口縁部が外方に直線的に開き、体部外面に強いろくろ目をもつ碗			2			
			⑧ 体部下半が膨らむ碗			1			
			(不明底部片)			6			
3318点	皿	陶器 皿	① 小型で、体部が短く立ち上がる。高台の断面形は四角形			9	80	2 %	3 %
			② 体部はやや丸みをもつ。見込みに蛇の目釉剥ぎ。高台の断面形は四角形			39			
			③ 口縁部「く」の字に外反し、見込みに蛇の目釉剥ぎ。高台の断面形は四角形			12			
			④ 体部は丸みを帯び、口縁部が玉縁。高台の断面形は四角形			10			
			⑤ 体部は丸みを帯び、口縁部はゆるやかに外反する。高台の断面形は四角形。			6			
			⑥ 体部はやや丸みをもつ。見込み蛇の目釉剥ぎ。高台の断面形は三角形。			2			
			⑦ 口縁部はほぼ直角に立ち上がり、多角形を呈する			2			
		素焼 皿	② 体部はやや丸みをもつ。高台の断面形は四角形			2	7	1 %以下	
			③ 口縁部「く」の字に外反。高台の断面形は四角形			3			
			⑤ 体部丸みを帯び、口縁部はゆるやかに外反する。高台の断面形は四角形			1			
			⑧ 底部と体部が明瞭に屈曲し、体部はまっすぐに外方にのびる			1			
	鉢	陶器 鉢	① 口縁部が大きく外反し、口縁部が多角形を呈する。高台の断面形は四角形を呈する			1	10	1 %以下	1 %以下
			② 体部丸く、口縁部玉縁 透明釉(灰釉流し掛け)			2			
			③ 半筒形を呈し、口縁部 内面肥厚	灰釉		1			
				鉄絵または染付		4			
			④ 大型、体部ボール状、口縁部平坦	外面鉄釉、内面口縁部のみ鉄釉		1			
			⑤ 大型、口縁部「く」の字に外反し、口縁部内面に突帯を施す	鉄釉		1			
		素焼 鉢	② 体部丸く、口縁部玉縁			1	1	1 %以下	
汁次	陶器汁次	鉄釉				1	1	1 %以下	1 %以下
爛徳利	陶器 爛徳利	鳶口	灰釉後藁灰釉			37	64	2 %	2 %
			灰釉後イッチン掛			1			
		形態不明	灰釉			1			
			鉄釉			24			
			鉄釉後イッchin掛			1			
	素焼 爛徳利	形態不明				6	6	1 %以下	
瓶または徳利	陶器 瓶または徳利	染付または鉄絵				3	28	1 %	1 %
		灰釉後藁灰釉				4			
		灰釉				12			
		鉄釉				9			
	素焼 瓶または徳利					19	19	1 %以下	
蓋物(蓋)	陶器 蓋	① 天井部平坦	鉄絵			3	52	2 %	3 %
			染付			3			
			灰釉			24			
		② 天井部中央が高く、山形を呈するもの	鉄絵			12			
			染付			10			

種類・器種		形態・施釉などの特徴			破片数	破片数合計	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合	
3318点	陶器あるいは陶器未製品(種類が特定可能なもの)	蓋物(蓋) 素焼 蓋	① 天井部平坦	鉄絵	11	52	2%		
			② 天井部中央が高く、山形を呈するもの		41				
	蓋物(身) 陶器 蓋物(身)	① 体部から口縁部が直線的、筒形を呈するもの	灰釉		3	4	1%以下	1%	
		② 体部上部に肩をもち、口縁部が短く直立するもの	鉄絵		1				
	素焼 蓋物(身)	② 体部上部に肩をもち、口縁部が短く直立するもの	無文		14	16	1%以下		
			鉄絵		2				
	土瓶蓋 陶器 土瓶蓋	① 山形	灰釉		25	146	4%	6%	
			鉄釉		1				
		② 落とし蓋	灰釉		25				
			鉄釉		95				
	素焼 土瓶蓋	① 山形			11	52	2%		
					41				
	土鍋蓋 陶器 鍋蓋	① 透明釉を施す。天井部には鉄絵の細線を数条描く。			18	23	1%以下	1%	
		② 灰釉	文様無し		1				
			天井部に数条の沈線		2				
		③ 鉄釉	文様無し		1				
			天井部に数条の沈線		1				
		④ 素焼 鍋蓋	文様無し		4	15	1%以下		
			天井部に数条の沈線	沈線凸部に鉄釉を施していないもの	5				
土瓶 陶器 土瓶	⑤ 天井部に数条の沈線		沈線凸部に鉄釉を施すもの		6				
	① 体部は丸形または算盤玉形を呈し、体部に鎬の文様を施すもの	鉄釉		229	585	17%	26%		
		鉄釉		12					
		灰釉		2					
		鉄釉		82					
	④ 体部は丸形または算盤玉形を呈し、灰釉後イッチン掛を施すもの			2					
		青緑色釉		1					
	文様・形態不明	鉄釉		105					
		灰釉		152					
	素焼 土瓶	体部に鎬の文様を施すもの			53	292	9%		
		文様・形態不明			239				
土鍋 陶器 土鍋	鉄釉				733	806	24%	29%	
					73				
	素焼 土鍋				169	169	5%		
行平鍋 陶器 行平鍋	鉄釉				5	18	1%以下	1%	
					10				
		外面に飛鉢を施し、鉄泥を塗布する。内面は灰釉を施す。			3				
	素焼 行平鍋				3	3	1%以下		
香炉または火入れ 陶器 香炉または火入れ	① 半筒形を呈するもの	透明釉		1	276	8%	10%		
		灰釉		19					

種類・器種			形態・施釉などの特徴			破片数 合計	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合
陶器あるいは陶器未製品(種類が特定可能なもの)	香炉または火入れ	陶器 香炉または火入れ						
3318点				鉄釉	2			
				染付	1			
			② 体部は丸く、頸部は立ち上がり、口縁部は外反するもの	鉄釉	4			
				灰釉	82			
			③ 筒形を呈するもの	湾曲する鎬を全体に施す。鎬凹部には灰釉、凸部には鉄釉を施す	53			
				鎬を施し、灰釉を施釉	3			
				鎬を施し、鉄釉を施釉	64			
				鎬を施し、鉄釉後灰釉を施釉	1			
				鎬を施し、灰釉後鉄釉を施釉	1			
				染付	2			
				鉄絵	2			
				灰釉施釉後鉄釉流し掛け	3			
				灰釉	4			
				鉄釉	6			
				体部状半に横方向沈線を施し、鉄釉を施釉するもの	5			
			④ 筒形を呈するもの。底部は基筈底。		1			
			筒形 または半筒形	鉄絵	1			
				鎬を施し、灰釉後藁灰釉を施釉	1			
				鎬を施し、鉄釉を施釉	1			
				灰釉後藁灰釉を施釉	1			
				鉄釉後灰釉を施釉	1			
				鉄釉	3			
			不明	灰釉	12			
				灰釉後鉄釉施釉	2			
	素焼 香炉または火入れ		① 半筒形を呈するもの	鉄絵	1	72	2 %	
			② 体部丸く、頸部は立ち上がり、口縁部外反		9			
			③ 筒形	鎬	25			
				湾曲する鎬を全体に施す。鎬凹部には灰釉、凸部には鉄釉を施す	14			
				刺突文	3			
				鉄絵	4			
				無文？	16			
灯明皿	陶器 灯明皿	灯	灰釉		146	146	5 %	5 %
	素焼 灯明皿					24		
灯明受皿	陶器 灯明受皿	灯	① 柱が外縁よりも低い	灰釉	40	41	1 %	2 %
	素焼 灯明受皿		② 柱が外縁よりもやや高い	灰釉	1			
灯明受台	陶器 灯明受台	灯	灰釉		3	4	1 %以下	1 %以下
			鉄釉		1			
ひょうそく	陶器 ひょうそく	ひ	灰釉		3	4	1 %以下	1 %以下
		そく	鉄釉		1			

種類・器種		形態・施釉などの特徴			破片数	破片数合計	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合				
3318点	陶器あるいは陶器未製品(種類が特定可能なもの)	ろうそく立て	陶器ろうそく立て			2	2	1%以下	1%以下			
			素焼ろうそく立て			4	4	1%以下				
	油注ぎ?	陶器油注ぎ?	① ランプ形		灰釉	1	2	1%以下	1%以下			
			形態不明		鉄釉	1						
			素焼油注ぎ?		形態不明	1	1	1%以下				
	水注	陶器水注	鉄釉			2	4	1%以下	1%以下			
			灰釉			2						
			素焼水注			1	1	1%以下				
	从飯器	陶器从飯器	灰釉			4	4	1%以下	1%以下			
						10	10	1%以下				
52点	磁器(種類が特定可能なもの)	碗	陶器 瓢	① 口縁部垂下	鉄釉のち藁灰釉流し	1	118	3%	4%			
					灰釉のち藁灰釉流し	1						
					鉄釉	93						
					灰釉肩部鉄釉流し	1						
					灰釉	1						
				③ 体部から口縁部がほぼ直線的で、口縁端部に刻み目を施すもの			118	3%	4%			
					綻方向の鏽	透明釉後一部藁灰釉						
				形態不明		1	118	3%	4%			
				陶器 瓢(底部)	鉄釉	12						
					灰釉	2						
				素焼 瓢(体部)								
水甕	陶器 水甕	流水状の陰刻文様と刺突文	流水状の陰刻文様と刺突文		灰釉後鉄釉または銅綠釉	6	6	1%以下	1%以下			
			流水状の陰刻文様と刺突文			4	4	1%以下				
		六角壺	鉄釉 灰釉後鉄釉・藁灰釉			5	5	1%以下	1%以下			
						1	1	1%以下				
						1	1	1%以下				
植木鉢	陶器 植木鉢	① 口縁部は逆L字状を呈し、口唇部に平坦面をもつもの	鉄絵		2	7	1%以下	1%以下	1%以下			
			体部上半に鉄釉を帯状に巡らす		1							
			灰釉施釉後鉄釉流し掛けするもの		1							
			体部上半に突帯をもち、灰釉を施すもの		1							
			口縁部形態不明		鉄絵							
		土管				2						
						1	1	1%以下	1%以下			
						1	1	1%以下	1%以下			
						1	1	1%以下	1%以下			
						1	1	1%以下	1%以下			
蓋	丸碗の蓋	碗	① 丸碗		5	25	1%	1%	1%			
			② 広東形碗		3							
			③ 端反碗		1							
			④ 筒端反碗		1							
			⑤ 青磁染付碗		1							
		不明(底部片など)			14							

種類・器種		形態・施釉などの特徴			破片数	破片数合計	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合	窯道具・明らかに平尾窯以外で生産された陶磁器・器種の特定できない陶磁器を除いた全破片数に対する割合
磁器（種類が特定可能なものの） 52点	Ⅲ	① 口径13~15cm 前後、体部はやや丸みをもつ ② 口径20~25cm 前後、口縁部端反で口縁端部が肥厚する ③ 口径20~25cm 前後、口縁端部輪花を呈する ④ 口径10cm 前後、体部やや直線的で見込蛇の目釉剥ぎ ⑤ 角皿 (高台径12cm 前後、蛇の目凹形高台、②または③の底部か?)	蛇の目凹形高台 輪高台、脣付のみ無釉 (底部不明)	5 3 2	7	25	1 %	1 %

表3 窯道具

種類		形態・施釉などの特徴			破片数	破片数合計
窯道具 677点	トチン	① 円柱状 ② 四角柱状		9 2	11	
	円錐ピン			92	92	
	環状粘土紐			8	8	
	弧状粘土紐			146	146	
	棒状粘土紐			2	2	
	L字状粘土紐			1	1	
	足付扁平環状円盤			70	70	
	扁平環状円盤			12	12	
	扁平円盤			23	23	
	足付扁平円盤			1	1	
	ボタン状円盤			3	3	
	扁平粘土塊			3	3	
	サヤ鉢			59	59	
	焼台	① 天井部は平坦で、天井部に最大径をもつ。天井部径20~30cm、側面は内側に湾曲。 ② 浅い鉢を逆に置いた形態で、底部に最大径をもつ。下部径8~13cm で、天井部に孔があくもの		2 193	195	
	逆台形ハマ（浅い皿形を呈するが、中実で、天井部は平坦）	① 直径10cm 以上 ② 直径 6 ~ 8 cm	中央部に孔がない 中央部に孔がある	3 1 2	6	
	敷板			2	2	
	チャツ			1	1	
	タコハマ			2	2	
	シノ			1	1	
	不明			39	39	

表5 器種が不明な陶磁器・明らかに平尾窯跡以外で生産された陶磁器等

種類		形態・施釉などの特徴		破片数	破片数 合計
陶器あるいは陶器未製品 (種類が特定不可能なもの) 4632点	素焼 碗または香炉	筒形	文様不明 鉄絵帶状	49 5	54 29 60 21 17 8 3 1 2 2 6 624 374 3 1 1063 1046 2 1274 1 44 1 1 7 23 3 1 32 3
	陶器 盆または鉢 (底部片)	底部片 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台断面形四角形 灰釉	14		
			1		
			11		
		鉄釉	3		
	素焼 盆または鉢 底部	高台断面形四角形	文様無し 見込み鉄絵 底部内面に陽刻	50 2 1	
			7		
			14 4		
			11 2 4		
	素焼 鉢または香炉 または火入れ	半筒形または筒形	文様無し 鉄絵帶状	14 4	
	陶器 香炉または火 入れまたは鉢	半筒形または筒形	無文 外面沈線	11 2	
			外面鉄絵	4	
	素焼 瓶または徳利 または爛徳利			8	8
	陶器 蓋物または水 注	外面肩部鉄釉		2	3
		鉄釉		1	
	素焼 仏飯器または ひょうそく			1	1
	素焼 蓋物身または 香炉・火入れ	体部半筒形		2	2
	素焼 土瓶?	注ぎ口		2	2
	素焼 行平? (持ち 手)			6	6
	陶器 土鍋または土 瓶 (底部から体部)	灰釉		171	624
		鉄釉		453	
	素焼 土鍋または土 瓶 (底部から体部)			374	374
	陶器 壺			3	3
	素焼 壺または徳利 (底部)			1	1
	陶器 (灰釉片)			1063	1063
	陶器 (鉄釉片)			1046	1046
	陶器 (透明釉片)			2	2
	陶器 (素焼片)			1274	1274
	陶器 (鉄絵片)			1	1
	陶器 (露体片)			44	44
磁器 (種類が特定 不可能な もの) 9点	磁器 盆?			1	1
	磁器 仏飯器?	染付		1	1
	磁器 不明	染付		7	7
	平尾窯跡 以外で生 産された もの	土師質土器片		23	23
	瓦			3	3
	色絵陶器碗			1	1
	磁器碗(型紙模など)			32	32
	須恵質片			3	3

陶器

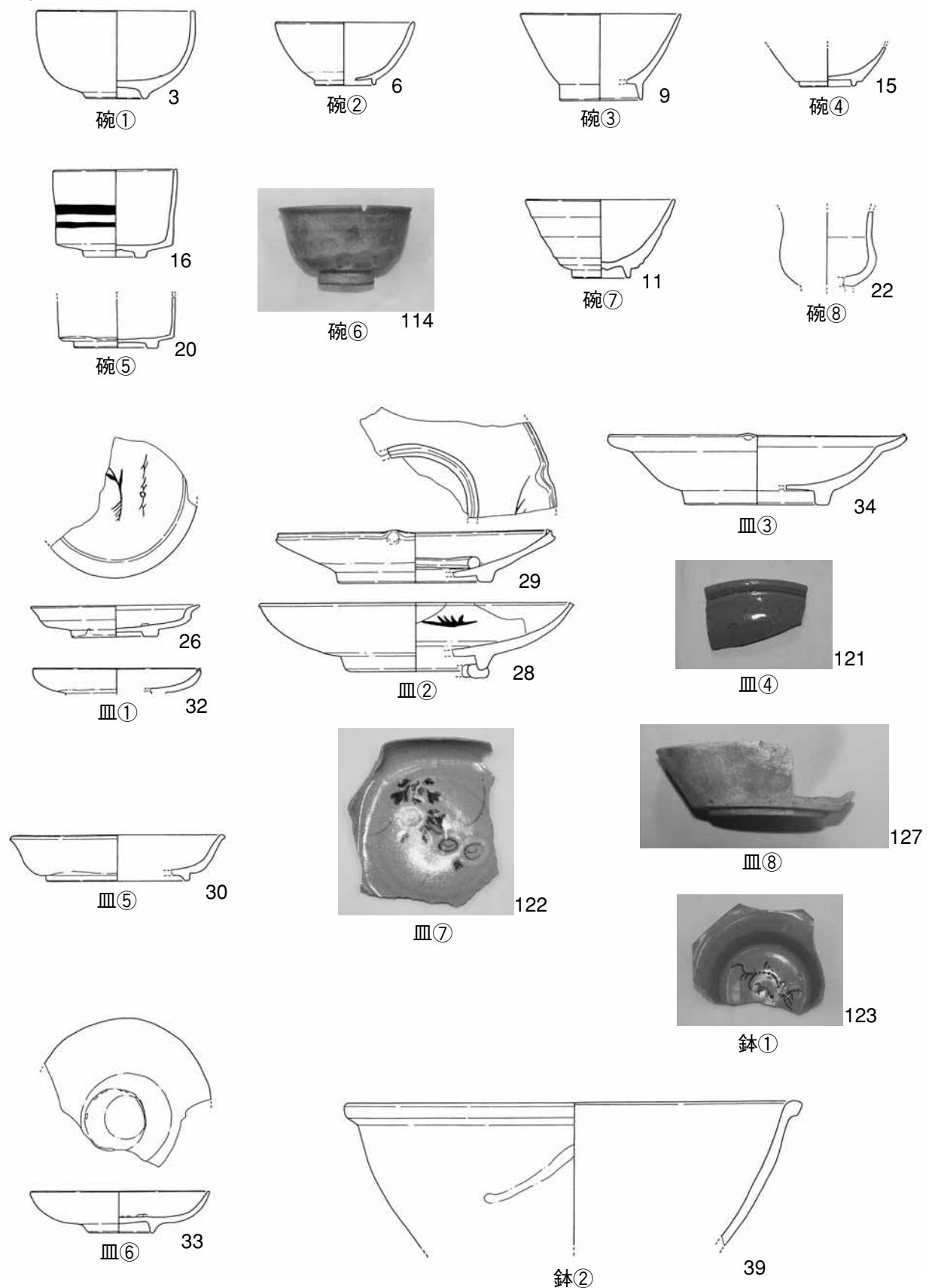


図9 陶器・磁器・窯道具の種類 1

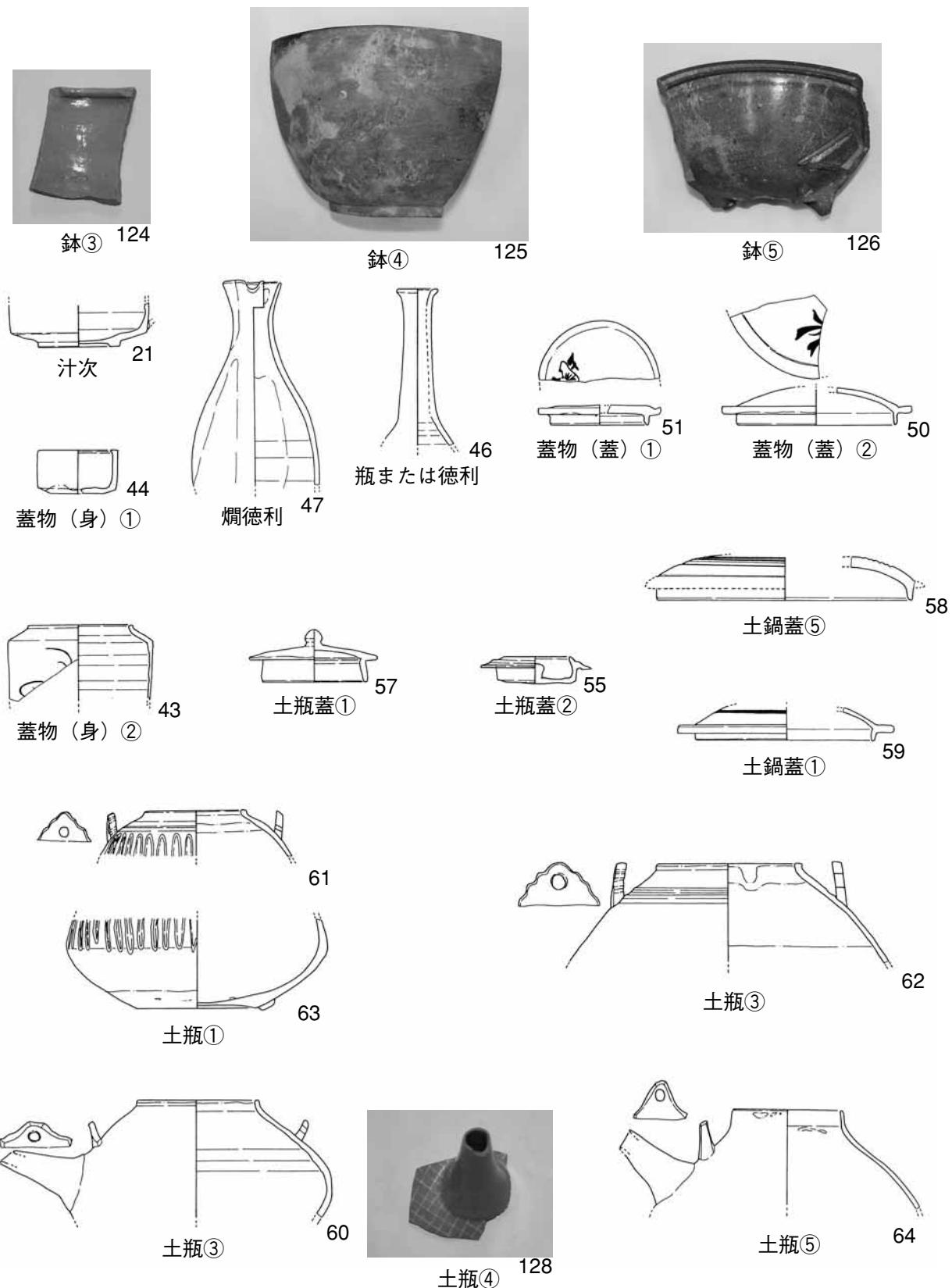
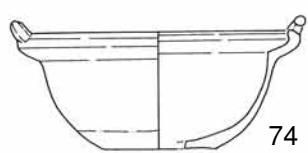


図10 陶器・磁器・窯道具の種類 2



土鍋（鉄釉）



土鍋（灰釉）

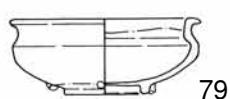


行平鍋 77



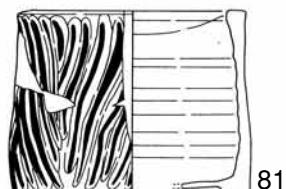
85

香炉または火入れ①

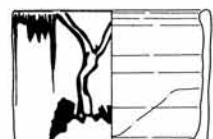


79

香炉または火入れ②

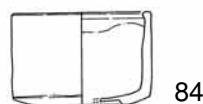


81



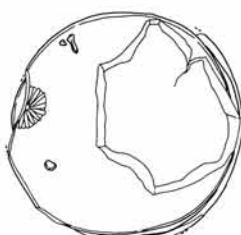
86

香炉または火入れ③



84

香炉または火入れ④



94

灯明受皿①



129

灯明受台



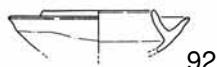
133

ひょうそく



97

灯明皿



92

灯明受皿②



132

水注



95

仏飯器



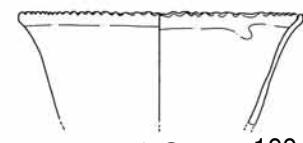
130

ろうそく立て

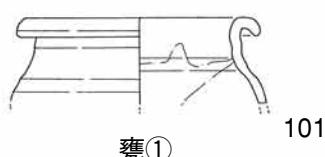


131

油注ぎ?



100



101

甕①



98

甕②



134

甕④

図11 陶器・磁器・窯道具の種類 3

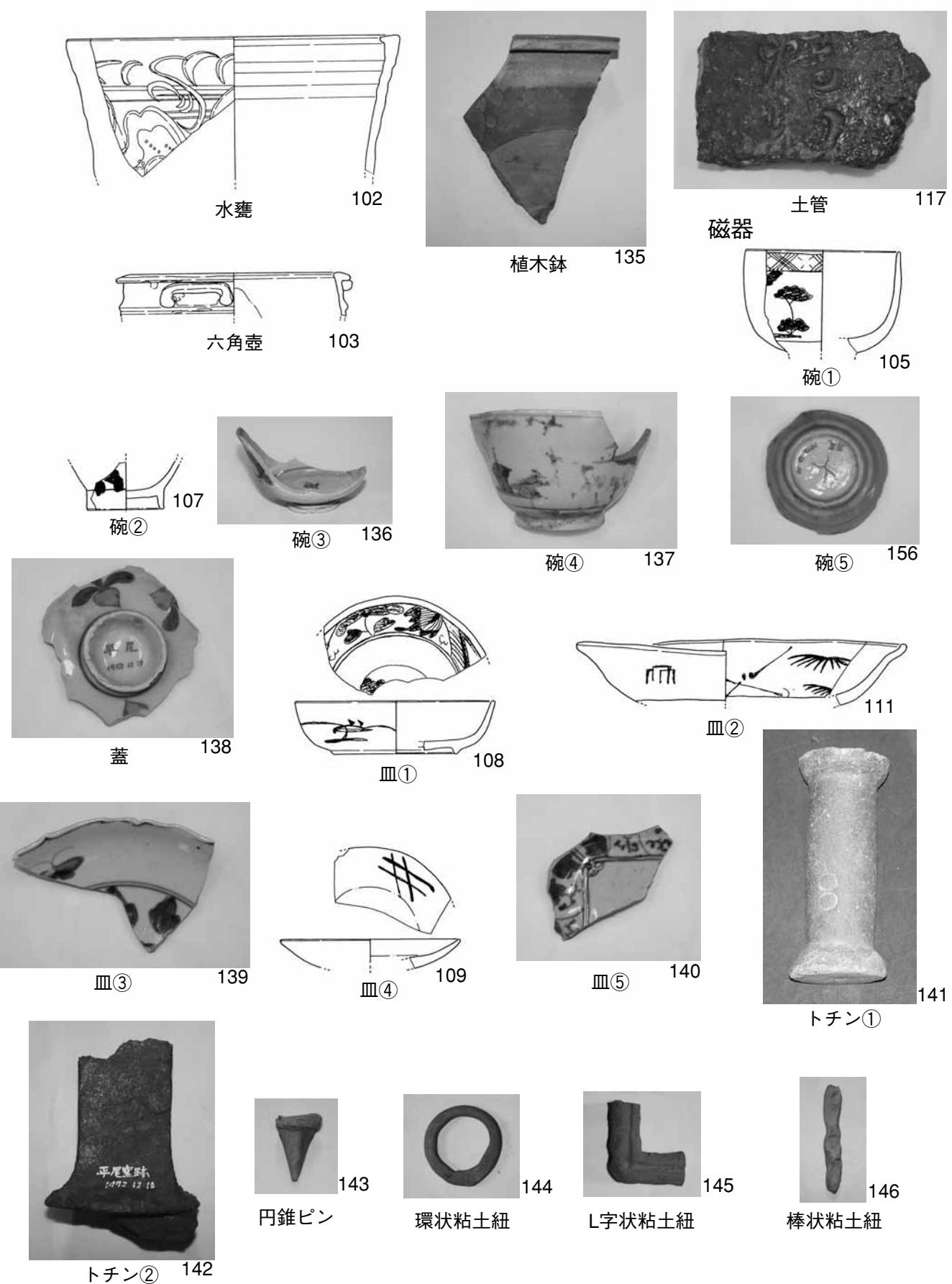


図12 陶器・磁器・窯道具の種類 4



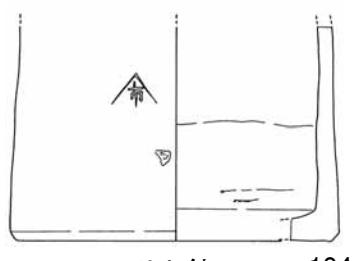
扁平環状円盤 147



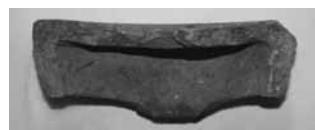
扁平円盤 148



足付扁平円盤 157



サヤ鉢 104



焼台① 149



焼台② 150



逆台形ハマ① 151



敷板 152



チャツ 153



タコハマ 154



シノ 155

図13 陶器・磁器・窯道具の種類 5

表4 遺物観察表

番号	種類	法量	残存率	調整・施釉など	胎土の色調
1	陶器 碗	口径11.0cm	口縁部1/8	外：体部鉄絵（黒褐色釉）後透明釉 内：透明釉	橙灰色
2	陶器 碗	口径10.4cm 底径4.8cm 高6.6cm	底部1/3	外：鉄絵（暗緑色釉）後透明釉、口唇部に陶器口縁部片（灰釉淡灰緑色釉）溶着 内：透明釉	暗灰褐色
3	陶器 碗	口径11.2cm	口縁部1/3 底部完存	外：灰釉（灰緑色釉）、畳付無釉、内：灰釉（灰緑色釉）、目跡3	灰色
4	陶器 碗	底径5.2cm	底部完存	外：鉄釉（褐色釉）、畳付無釉 内：鉄釉（褐色釉）	乳灰色
5	陶器 碗	口径10.8cm	口縁部1/3	外・内：口縁部暗緑灰色釉、体部藁灰釉（乳灰色釉）	淡灰色
6	陶器 碗	口径9.6cm 底径4.2cm 高4.5cm	口縁部1/3	外：口縁部～体部上半灰釉（乳灰色釉）、体部下半～底部無釉 内：灰釉（乳灰色釉）	淡橙色
7	陶器 碗	底径5.0cm	底部1/2	外：鉄絵（暗褐色釉）、透明釉 内：透明釉	淡黄色
8	素焼 碗	底径6.2cm	底部1/4	回転ナデ	淡橙色
9	陶器 碗	口径11.0cm 底径5.8cm 高6.0cm	口縁部1/4	外：灰釉（灰緑色釉）、畳付無釉 内：灰釉（灰緑色釉）	淡灰色
10	素焼 碗	口径12.2cm 底径7.0cm 高さ6.5cm	口縁部1/3	外：回転ナデ 内：回転ナデ	乳黄褐色
11	素焼 碗	口径10.4cm 底径4.0cm 高5.4cm	底部完存、 体部1/2	外：底部渦兜巾	淡橙色
12	素焼 碗	底径2.3cm	底部完存	外：鉄絵（黑色釉）	淡灰黄色
13	素焼 碗	底径3.8cm	底部2/3	外：鉄絵（黑色釉）	断・外：淡灰 橙色 内：暗 灰色
14	素焼 碗	底径4.2cm	底部完存	外：鉄絵（暗褐色釉）	乳黄色
15	陶器 碗	底径4.0cm	底部完存	外：体部灰釉（淡灰緑色釉）、底部無釉 内：灰釉（淡灰 綠釉）	淡灰色
16	陶器 碗	口径8.8cm 底径4.6cm 高6.0cm	底部完存	外：体部鉄絵（黒褐色）後透明釉、底部無釉、渦兜布 内：透明釉	橙灰色
17	陶器 碗	口径8.0cm	口縁部1/4	外：染付（暗青色） 灰釉（淡灰緑色釉） 内：灰釉（淡 灰緑色釉）	淡灰色
18	陶器 碗 足付扁平環状円盤	碗底径4.4cm 足付扁平環状円盤 直径7.0cm	碗底部完存 足付扁平環状円盤完存	碗 外：高台部外面一部灰釉（淡緑灰釉）、底部渦兜布、 無釉 内：灰釉（淡緑灰色釉）足付環状円盤 脚3、回転 系切痕	碗 乳灰黄色
19	陶器 碗	底径4.0cm	底部完存	外：鉄絵？染付？（暗灰緑色釉）後透明釉 内：透明釉、 目跡	淡灰色
20	陶器 碗	底径6.0cm	底部完存	外：体部灰釉（灰色釉）、底部無釉 内：灰釉（灰色釉）	灰色
21	陶器 汁次	底径5.4cm	底部2/3	外：体部鉄釉（暗褐色釉）、底部無釉 内：鉄釉（暗褐色釉）	灰橙色
22	素焼 碗		体部1/4	回転ナデ	淡橙灰色
23	陶器 碗	底径7.2cm	体部1/4	外：体部灰釉（灰緑色釉）、体部下半～底部無釉、内：灰 釉（灰緑色釉）、目跡	乳橙灰色
24	陶器 碗	底径7.0cm	底部1/2	外：体部鉄釉（黑色釉）流し掛け、底部無釉 内：透明釉、 目跡2	淡灰色
25	足付扁平環状円盤 陶器 碗または皿	足付扁平環状円盤径6.8cm 碗底径6.2cm	碗底部完存 足付扁平環状円盤完存	足付扁平環状円盤 脚3、回転系切痕 碗 外：体部透明 釉、底部無釉 内：透明釉	乳黄色
26	陶器 皿	口径12.0cm 底径6.2cm 高2.2cm	底部2/3	外：体部灰釉（淡灰緑色釉）、底部無釉 内：染付（暗青 色釉）、灰釉（淡灰緑色釉）、目跡1	淡灰色
27	陶器 皿	口径19.0cm	口縁部1/4	外：灰釉（淡灰緑色釉）内：鉄絵？染付？（黑色釉）、灰 釉（淡灰緑色釉）	淡灰橙色
28	陶器 皿	口径21.4cm 底径10.0cm 高4.8cm	底部1/4	外：体部灰釉（淡灰緑色釉）、底部無釉、畳付け環状粘土 紐溶着 内：蛇の目釉剥ぎ、染付（暗青色釉）、灰釉（淡 灰緑色釉）	淡橙灰色
29	陶器 皿	口径19.0cm 底径10.6cm 高3.5cm	底部1/4	口縁部一部輪花 外：体部上半灰釉（淡緑灰色釉）、体部 下半～底部無釉 内：見込み蛇の目釉剥ぎ、釉剥ぎ上面 砂・環状粘土紐溶着、染付？鉄絵？（黒青色釉）	淡灰色
30	陶器 皿	口径15.0cm 底径9.8cm 高3.1cm	口縁部1/5	外：体部灰釉（淡黄緑色釉）、底部無釉 内：灰釉（淡黄 緑色釉）	淡灰色
31	陶器 皿	口径10.0cm 底径5.2cm 高1.6cm	口縁部・底 部1/4	口縁部一部輪花 外：透明釉 内：染付（黑色釉、淡灰色 釉）	淡灰色
32	陶器 皿	口径11.6cm 底径6.8cm 高2.0cm	口縁部1/4	口縁部一部輪花 外：体部灰釉（淡黄灰色釉）、底部無釉 内：灰釉（淡黄灰色釉）	淡黄色
33	陶器 皿	口径12.2cm	口縁部1/2	外：鉄釉（茶褐色釉）、畳付無釉、内：鉄釉（外縁部茶褐 色釉、中心部暗緑褐色釉）、蛇の目釉剥ぎ 蛇の目釉剥ぎ 上面に磁器片溶着	灰色
34	素焼 皿	口径20.6cm	底部1/2	口縁部一部輪花 回転ナデ	淡橙色
35	陶器 皿	口径19.0cm	口縁部1/6	口縁部一部輪花 外・内：灰釉（暗灰緑色釉）	灰色

番号	種類	法量	残存率	調整・施釉など	胎土の色調
36	陶器 皿	口径13.8cm 底径4.6cm 高2.6cm	口縁部1/4	外：鉄釉（暗褐色釉）、疊付無釉 内：鉄釉（暗褐色釉）、見込み蛇の目釉剥ぎ、蛇の目釉剥ぎ上に磁器片溶着	暗灰色
37	陶器 皿	底径7.8cm	底部1/4	外：体部灰釉（灰緑色釉）、底部無釉 内：見込み蛇の目釉剥ぎ、灰釉（淡灰緑色釉）	淡灰橙色
38	陶器 皿	底径8.4cm	底部完存	外：体部灰釉（淡灰色釉）、底部無釉 内：灰釉（淡灰色釉）、見込み蛇の目釉剥ぎ	淡灰色
39	陶器 鉢	口径32.0cm	口縁部1/6	外：透明釉、一部灰釉（淡灰色釉）流し掛け 内：透明釉	乳黄色
40	陶器 鉢	底径8.8cm	底部完存	外：体部透明釉、底部無釉 内：透明釉、目跡5	乳黄色
41	素焼 皿	口径14.4cm 底径8.2cm 高4.6cm	口縁部1/2	回転ナデ	乳黄色
42	素焼 皿	底径6.2cm	底部完存	回転ナデ 内：ヘラ状工具痕	乳黄色
43	素焼 蓋物（身）	口径7.0cm	口縁部1/4	外：鉄絵（黒色釉）	淡橙灰色
44	陶器 蓋物（身）	口径5.4cm 底径3.6cm 高2.9cm	底部1/3	外：口唇部無釉、体部灰釉（淡緑色釉）、底部無釉 内：口縁部無釉、体部～底部灰釉（淡緑色釉）	淡橙灰色
45	陶器 瓶または徳利	口径2.7cm	頸部完存	外・内：灰釉（乳灰色～黒灰緑色）	淡灰色
46	陶器 瓶または徳利	口径2.8cm	口頸部完存	外：鉄釉（褐色～暗褐色） 内：鉄釉（褐色～暗褐色）	淡灰色
47	陶器 煙徳利	口径4.0cm	体部完存	外：灰釉後藁灰釉、青紫色釉 内：口縁部～体部上半灰釉 後藁灰釉、体部無釉	淡灰色
48	素焼 蓋	口径13.0cm	口縁部1/6	回転ナデ	淡橙灰色
49	陶器 蓋	底径13.4cm	天井部1/3	外：天井部染付（暗青色釉）後透明釉 内：無釉	乳青色
50	陶器 香炉または火入れ	底径10.8cm	天井部1/6	外：鉄絵（黒褐色）後灰釉（淡灰色） 内：無釉	淡橙灰色
51	陶器 蓋	天井部径8.2cm 底径6.6cm 高1.4cm	天井部1/2	外：天井部染付蝶（暗青色釉）後透明釉 内：無釉	淡黄色
52	陶器 蓋	天井部径5.8cm 底径4.4cm 高1.0cm	天井部3/4	外：天井部溶着痕、染付（黒青色釉）後透明釉 内：無釉	灰色
53	陶器 蓋	天井部径7.4cm 底径6.4cm 高1.1cm	天井部1/4	外：天井部鉄絵（黒緑色釉）後灰釉（淡灰色） 内：無釉	淡灰色
54	素焼 蓋	天井部径7.0cm 底径5.0cm 高0.9cm	天井部1/4	外：天井部鉄絵（黒色）	淡橙灰色
55	陶器 蓋	口径7.8cm 高1.6cm 底径7.6cm	底部完存	外：鉄釉（暗褐色釉）、つまみ縫状の線刻 内：無釉	淡黄色
56	陶器 土瓶蓋	天井部径5.2cm 底径4.0cm 高1.9cm	口縁部4/5	外：鉄釉（褐色釉） 内：鉄釉（褐色釉）	淡黄灰色
57	陶器 蓋	天井部径9.0cm 高3.5cm	天井部3/4	外：灰釉（淡灰色釉） 内：無釉	淡茶灰色
58	素焼 土鍋蓋	底径17.0cm	天井部1/6	外：天井部沈線数条、沈線凸部鉄釉	淡灰色
59	陶器 土鍋蓋	底径12.0cm	天井部1/6	外：鉄絵（黒色釉）後灰釉（灰緑色釉） 内：無釉	淡灰色
60	陶器 土瓶	口径8.4cm	体部1/6	外：灰釉（暗緑灰色釉）、口唇部無釉 内：灰釉（暗緑灰色釉）	淡灰色
61	陶器 土瓶	口径7.0cm	体部1/6	外：肩部沈線、体部鍋、鉄釉、暗褐色～黒色釉)、口唇部無釉 内：鉄釉（褐色釉、黒色釉、暗褐色釉）	乳灰色
62	陶器 土瓶	口径10.0cm	体部1/5	外：体部上半沈線2条、鉄釉（暗褐色釉） 内：口縁部無釉、頸部鉄釉（暗褐色釉）、体部上半無釉、体部下半鉄釉（暗褐色釉）	淡黄灰色
63	陶器 土瓶	底径8.4cm	底部1/2	底部外面溶着痕 外：体部上半鍋、鉄釉（黒褐色釉）、体部下半～底部無釉 内：鉄釉（黒褐色釉）、目跡	淡黄色
64	陶器 土瓶	口径7.6cm	口縁部1/2	外：青緑色釉 口唇部無釉 内：無釉、一部青緑色釉	灰褐色
65	陶器 土瓶	底径8.2cm	体部1/6	外：体部鍋、鉄釉（茶褐色釉）後黒色釉流し掛け 体部下半～底部無釉 内：体部鉄泥、底部鉄釉（茶褐色釉）後黒色釉流し掛け	淡灰色
66	陶器 土瓶	底径7.6cm	底部1/4	外：体部上半鉄釉（茶褐色釉）、体部下半無釉 内：鉄釉（茶褐色釉）、目跡2	淡褐色
67	陶器 土瓶	底径3.8cm	底部1/2	外：体部鉄釉（茶褐色釉）、体部下半～底部無釉 内：鉄釉（茶褐色釉）	淡灰色
68	陶器 土瓶	底径7.2cm	底部1/2	やや歪む 外：体部鉄釉（茶褐色釉）、体部下半～底部無釉、底部輪状溶着痕 内：鉄釉（茶褐色釉）、目跡1	淡灰色
69	陶器 土瓶	底径7.0cm	底部完存	外：体部上半灰釉（淡黃灰色釉） 体部下半無釉、回転ヘラ削り 底部刻印 内：灰釉（淡黃灰色釉）	乳黄灰色
70	陶器 土瓶	底径5.6cm	体部1/4	外：体部溶着痕、体部灰釉（淡灰色釉）、体部下半～底部無釉 内：灰釉（淡灰色釉）、一部藁灰釉？（乳白色釉）	淡灰色

番号	種類	法量	残存率	調整・施釉など	胎土の色調
71	陶器 土瓶	底径8.8cm	底部2/3	外：回転ヘラ削り、体部上半灰釉（乳灰色釉）、体部下半無釉 内：灰釉（乳灰色釉）	淡灰色
72	素焼（持ち手）				淡橙灰色
73	素焼（持ち手）				淡橙灰色
74	陶器 土鍋	口径14.8cm 底径6.0cm 高5.9cm	口縁部1/6	外：体部上半鉄釉（茶褐色釉）、底部無釉 内：鉄釉（茶褐色釉）	淡灰色
75	陶器 土鍋	口径17.4cm	口縁部1/4	外：脚1、口縁部～体部灰釉（淡灰色釉）、体部下半～底部無釉 内：灰釉（淡灰色釉）	淡灰色
76	陶器 土鍋	口径18.0cm	口縁部1/6	外：鉄釉（茶褐色釉） 内：鉄釉（茶褐色釉）	淡灰色
77	陶器 行平鍋	口径16.0cm	口縁部1/8	外：片口、鉄釉（茶褐色釉） 内：鉄釉（茶褐色釉）	淡灰色
78	陶器 香炉ま たは火入れ	口径13.0cm	口縁部1/4	外：鉄釉（暗褐色釉） 内：口縁部鉄釉（暗褐色釉）、体部～底部無釉	乳灰黄色
79	陶器 香炉ま たは火入れ	口径10.0cm 底径4.6cm 高4.0cm	口縁部1/2 底部完存	外：口縁部～体部灰釉（灰色釉） 内：口縁部灰釉（灰色釉）	淡茶褐色
80	陶器 香炉ま たは火入れ	口径10.0cm	体部1/4	外：鎬、鎬凹部灰釉（淡綠灰色釉）、凸部鉄釉（暗褐色釉） 内：口縁部灰釉（淡綠色釉）、体部～底部無釉	淡灰色
81	陶器 香炉ま たは火入れ	口径11.2cm 底径12.2cm 高9.5cm	底部1/4	外：口唇部無釉、体部鎬、鎬凹部鉄釉（黒色釉）、凸部鉄釉（暗褐色釉） 内：口縁部鉄釉？（褐色釉）、体部～底部無釉	淡橙灰色
82	陶器 香炉ま たは火入れ	底径11.0cm	底部完存	外：底部粘土塊溶着、体部鎬、鎬凹部鉄釉（暗褐色釉）、 鎬凸部透明釉 内：無釉、底部環状粘土紐溶着、環状粘土紐上面円錐ピン痕2	乳灰色
83	陶器 香炉ま たは火入れ	口径9.2cm 底径5.8cm 高5.8cm	口縁部1/2	外：体部沈線、鎬、鉄釉（灰褐色釉）、底部無釉 内：口縁部鉄釉（灰褐色釉）、体部～底部無釉	灰褐色
84	陶器 香炉ま たは火入れ	口径7.0cm 底径4.8cm 高4.8cm	口縁部1/3	外：体部灰釉、底部無釉 内：口縁部灰釉、体部～底部無釉	淡橙灰色
85	陶器 香炉ま たは火入れ	口径6.0cm 底径4.4cm 高5.5cm	底部1/3	外：体部灰釉（灰綠色釉）、底部無釉 内：口縁部（灰綠色釉）、体部～底部無釉	橙灰色
86	陶器 香炉ま たは火入れ	口径10.2cm 底径10.0cm 高7.0cm	口縁部1/3	外：染付（黒色～黒青色）、乳灰色釉 底部無釉 内：体部上半乳灰色釉 体部下半～底部無釉	淡茶灰色
87	陶器 香炉ま たは火入れ	底径10.0cm	底部1/3	外：体部鉄釉（暗褐色釉）、底部無釉 内：無釉	淡黃褐色
88	陶器 香炉ま たは火入れ	底径4.2cm	底部1/2	外：脚1、体部透明釉、底部無釉 内：無釉	淡黃灰色
89	陶器 香炉ま たは火入れ	底径5.2cm	底部完存	外：体部灰釉（淡灰綠色釉）、底部無釉 内：無釉、見込み輪状溶着痕	淡灰黄色
90	素焼 香炉ま たは火入れ	底径8.0cm	底部1/4	外：鉄絵（黒色釉）後施釉（施釉するが、本焼き前） 内：無釉	乳橙灰色
91	陶器 灯明皿	口径9.4cm 底径4.4cm 高2.1cm	口縁部3/4	外：円錐ピン1溶着、口縁部灰釉（淡綠灰色釉）、体部～底部無釉 体部別個体口縁部（灰釉、淡綠灰色釉）片溶着 内：斜格子の御描文、溶着痕、灰釉（淡綠灰色釉）	灰色
92	陶器 灯明受 け皿	口径6.0cm、受け部径9.4cm	口縁部1/4	外：口縁部～体部上半灰釉、体部下半無釉 内：灰釉（淡綠灰色釉）	淡綠黄色
93	陶器 灯明受 け皿	口径10.4cm 底径4.6cm 高2.6cm	口縁部1/3	外：口縁部灰釉（淡綠灰色釉）、体部～底部無釉 内：受け部端部無釉、その他灰釉（淡綠灰色釉）	灰色
94	陶器 灯明受 け皿	口径11.6cm 底径5.0cm 高2.1cm	口縁部1/2	外：口縁部灰釉（淡綠灰色釉）、体部～底部無釉 内：受け部端部無釉、その他灰釉（淡綠灰色釉）	灰色
95	素焼 仏飯器	口径6.6cm 底径4.6cm 高6.0cm	脚柱部完存	外：底部回転糸切り痕	淡橙灰色
96	陶器 仏飯器	底径4.4cm	脚部完存	外：体部～脚部灰釉（淡灰綠色釉）、底部回転糸切り痕、 無釉 内：灰釉（淡灰綠色釉）一部発泡	淡灰色
97	陶器 灯明皿	いずれも口径11.8cm 高2.3cm 底径4.0cm	ほぼ完存	灯明皿4個体、灯明皿の上には板状粘土塊溶着、外：体部上半灰釉（淡灰綠色釉） 内：菊花文貼り付け、灰釉（淡灰綠色釉）	淡灰色
98	陶器 瓢	口径24.0cm	口縁部1/5	外：肩部沈線4条、体部一部刷毛目、鉄釉（褐色釉）、口縁部一部無釉 内：鉄釉（褐色釉）	灰色
99	陶器 瓢	口径18.4cm	口縁部1/4	外：口縁部灰釉（淡灰綠色釉）、体部灰釉後鉄釉（暗褐色釉）流し掛け 内：口縁部灰釉（淡灰綠色釉）、体部鉄釉（暗褐色釉）	淡灰色
100	陶器 瓢	口径20.0cm	口縁部1/6	口縁部刻み目 外：口縁部銅緑釉（青灰色釉）、体部透明釉 内：口縁部銅緑釉（青灰色釉）、体部透明釉	淡黃灰色
101	陶器 瓢	口径15.4cm	口縁部1/6	外：灰釉後藁灰釉 内：口縁部灰釉後藁灰釉、体部無釉	淡灰色
102	陶器 水甕	口径32.0cm	口縁部1/6	外：灰釉（淡綠色釉）、一部銅緑釉（青綠色釉）流し掛け 内：灰釉（淡綠色釉）	淡黃灰色
103	陶器 六角壺	口径20.8cm	口縁部1/8	外：灰釉（淡綠色釉）後一部鉄釉（黒褐色釉）、一部藁灰釉（乳白色） 内：口縁部灰釉（淡綠色釉）、体部無釉	淡灰色

番号	種類	法量	残存率	調整・施釉など	胎土の色調
104	サヤ鉢	底径22.0cm	底部1/8	外：体部「市」印刻	外：暗茶灰色 ～乳黄色 内：茶褐色
105	磁器 碗	口径11.2cm	口縁部1/4	外：染付（暗青色） 内：透明釉	乳灰黄色
106	磁器 碗		口縁部片	外：染付（暗青色） 内：染付（暗青色）	白色
107	磁器 碗	底径5.6cm	底部3/4	外：染付（暗青色） 内：黒色釉（自然釉？）	白色
108	磁器 皿	口径14.4cm 底径9.0cm 高3.9cm	口縁部1/4	外：染付（暗青色） 体部別個体溶着痕 内：染付（暗青色）	淡灰色
109	磁器 皿	口径12.0cm	口縁部1/4	外：透明釉 内：蛇の目釉剥ぎ、染付（暗青色）	白色
110	磁器 皿	口径21.8cm	口縁部1/8	歪む 外：染付（暗青色釉）唐草文 内：染付（暗青色釉） 唐草文墨弾き	白色
111	磁器 皿	口径24.0cm	口縁部1/6	歪む 外：染付（暗青色釉）源氏香 内：染付（暗青色釉） 竹？	淡灰色
112	磁器 皿	底径12.4cm	底部1/3	歪む 外：体部透明釉、底部無釉 内：染付（暗青色）	白色
113	陶器 碗	口径12.5cm 底径6.5cm 高4.5cm	口縁部1/2 底部1/2	底部円盤充填により成形 外：口縁端部付近灰釉（灰緑色釉）、体部巣灰釉（乳灰色釉）、体部下半～底部無釉 内：口縁端部付近灰釉（灰緑色釉）、体部～底部灰釉（乳灰色釉）	淡灰色
114	陶器 碗	口径9.2cm 底径3.8cm 高5.2cm	底部完存 口縁部1/2	外：体部亀甲形面取り、灰釉（乳灰色釉）、体部下部ヘラ状工具による刻み、豈付無釉 内：灰釉（乳灰色釉）	淡黄灰色
115	油注ぎ？	口径5.0cm 底径4.2cm 高3.7cm	底部完存 口縁部1/2	外：体部下半～底部無釉、口縁端部無釉、体部灰釉（淡灰緑色釉） 内：灰釉（淡灰緑色釉）	淡黄灰色
116	陶器 水甕	底径17.0cm	底部完存	外：体部刺突、ヘラ彫り、灰釉（淡灰緑色釉）、底部無釉 ヘラ描き「秀郎」 内：鉄釉、団子トチの上に環状扁平円盤	淡灰黄色
117	陶器 土管	継6.2cm 横10.5cm 残存 厚2.5cm	破片	外：ヘラ描き「焼物」	茶褐色（白色砂粒混じる）

番号	種類	法量	調整・施釉など	胎土の色調
118	(下から) 香炉または火入れ サヤ鉢 (サヤ鉢口縁部に) 環状粘土紐 サヤ鉢 香炉または火入れ (サヤ鉢口縁部に) 環状粘土紐 サヤ鉢 香炉または火入れ (香炉または火入れの底部内面に) 環状粘土紐	(上から2番目のサヤ鉢) 底径16.0cm 前後9.5cm	最上部の香炉または火入れ 外：鎬、凹部灰釉（淡灰緑色釉）、凸部鉄釉（暗褐色色釉） 内：無釉	(最上部の香炉または火入れ) 淡灰黄色
119	(下から) 環状粘土紐 土鍋？ 土鍋？ 土鍋 扁平粘土塊 環状粘土紐 土鍋？ 土鍋？ 土鍋 土鍋 扁平粘土塊 環状粘土紐 土鍋 圓錐ビン 土鍋 圓錐ビン 土鍋	(上から6番目の土鍋) 口径15cm前後	土鍋 内・外：鉄釉（褐色釉）	土鍋 淡灰黄色

写真図版 1



六車惠一氏撮影

写真図版 2



六車恵一氏撮影

写真図版 3



写真図版 4



写真図版 5



写真図版 6



写真図版 7



写真図版 8

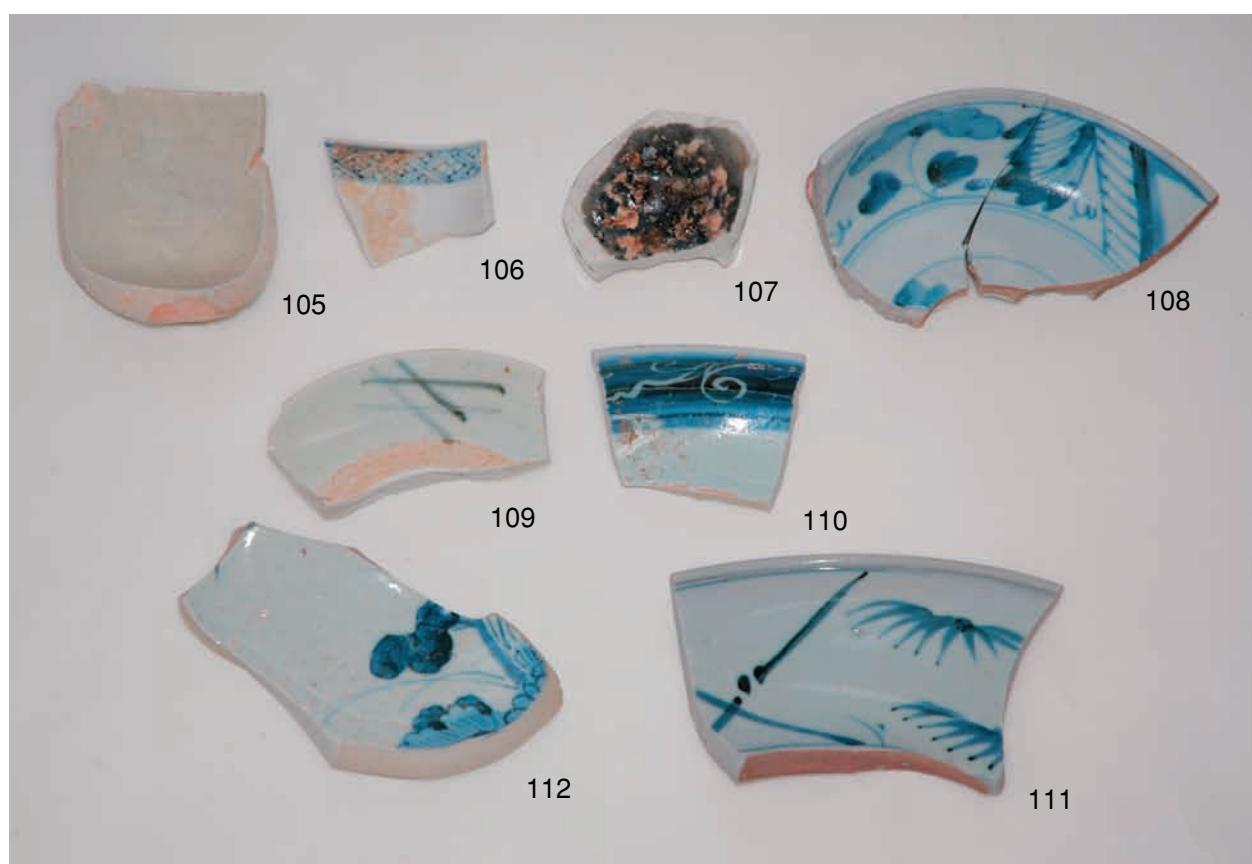
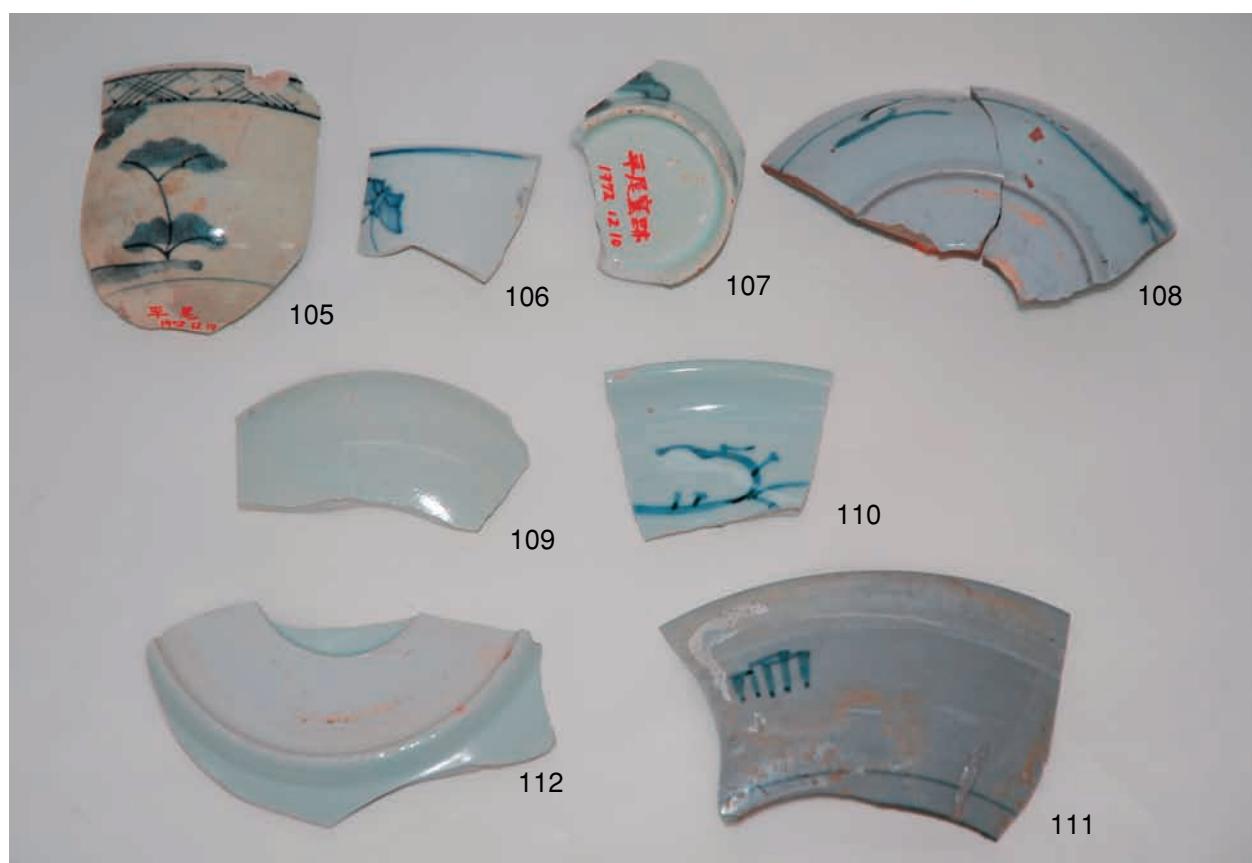


写真図版 9





写真図版11



写真図版12



116 底部外面のヘラ描き
(『吉金窯を中心とした古富田』
香川県文化会館・大川町 1969 より転載)

